VIEW21

2009 June 6月

高校版 Volume 2

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

鬼と恐れられ神と崇められた師の真髄を受け継ぎたい
群馬県立伊勢崎高校◎高橋 博

4 特集

「大学入試分析」を生かす

6 調査結果 高校での大学入試分析の現状
『VIEW21』高校版「大学入試と進路指導に関する教師アンケート」より

9 学校事例❶ 山形県立山形南高校
低学年時からの学力と大学入試結果との関連を探り、指導に生かす

12 学校事例❷ 愛知県立刈谷高校
生徒向け「大学入試問題研究」を通し、教師の教科指導力を高める

15 学校事例❸ 長崎県立長崎北高校
「北高ボーダー」をつくり、合格可能性を教師全員で分析

18 インタビュー 「高校生のため」の大学入試分析が生徒の進路実現を保証する
前・島根県立益田高校校長◎柴田 博

20 調査データから探る指導のヒント

「興味のある学問分野」で大学を選んだ学生は約65%
Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

21 指導変革の軌跡

22 鳥取県立倉吉西高校
進学実績向上◎高大連携と探究活動で定員割れの危機から県内有数の人気校に

26 東京都・私立淑徳巣鴨中学高校
大学入試問題研究◎入試問題研究を通して授業力、受験指導に対する意識を高める

30 兵庫県立夢前(ゆめさき)高校
指導力向上◎徹底したOJTで教師の意識が高まり、そして、生徒が変わる

34 生きたデータの徹底活用

2年生夏の進路意識向上と生活習慣の確立

38 未来をつくる大学の研究室

男女共同参画社会の実現に向け
憲法学からジェンダーに迫る
東北大大学院 法学研究科 ジェンダー平等と多文化共生研究センター

42 30代教師の情熱

生徒の力を信じ、その可能性を正しい方向に導ける教師でありたい
三重県立桑名北高校◎中村陽明

48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

鬼と恐れられ神と崇められた師の真髄を受け継ぎたい

群馬県立伊勢崎高校 高橋 博 TAKAHASHI HIROSHI

「感動する授業が目の前で展開された時、生徒はその教科から決して逃げなくなる。たとえ、その先の道がどれほど厳しくとも――――」。群馬県立伊勢崎高校の高橋博先生がその「定理」を学んだのは、教師としての真髄である「授業力」で生徒からの全幅の信頼を我がものとする偉大な先輩教師からだった。生徒として「鬼教師」に学び、そして後輩として「数学の神様」に師事したその歩みを振り返る。

それは私が高校3年生になって初めての数学の授業でした。群馬県立太田高校の生徒だった私の前に、吉原一夫先生は竹刀を携えて現れたのです。前任の工業高校では厳しい指導で「鬼」とあだ名されていたことも知っていましたから、教室の全員が「これはとんでもない先生に教わることになった！」と緊張に身を硬くしたはずです。

授業中の先生はとにかく口が悪く、「こんな問題も分かんねえのか！」と生徒を叱咤(しったた)しました。でも、生徒はやる気にあふれていました。先生の授業が面白かったからです。先生は「教科書とは違うけど、おれならこうやって解く」とさまざまな解法を見せてくれました。私たちはそれを「吉原式」とたたえ、「参考書にまとめましょう」と真顔で先生に提案しました。「吉原先生に数学を習って分からないのなら自分が悪い」と生徒が口にするほど、皆が先生に心酔していました。物理学を志していた私が数学の教師を目指すようになったのも、先生の影響であることは間違いありません。

教師になって10年目。32歳の時に、私は母校へ赴任しました。吉原先生は既に赴任17年目を迎えており、その頃は「吉原大明神」と生徒に呼ばれていました。鬼から神様に格上げです。全校集会では校長から「高橋先生は吉原先生の教え子です。立派に成長して母校に帰ってきました」と紹介され、照れ臭く感じたことを覚えています。

当時の太田高校は、数学科を中心に進学校として更に成長しており、「自分は通用するのか？」と不安もありました。質問に答えられなければ、生徒は自分から離れていくだろう。緊張感を持っての着任でした。そんな私を先生は「高橋が参加してくれてうれしいよ。期待しているから」と迎えてくれました。

「参加」という言葉に、集団の力で生徒を育てるという先生の意志を感じました。実際、数学科は吉原先生を中心に意思統一が図られ、私も先生から1つでも学び取ろう思いました。

吉原先生の授業からは多くを

先輩教師の言葉

収穫を予感した生徒だから厳しい指導についてきた

元・群馬県立太田高校
YOSHIHARA KAZUO 吉原一夫

生徒は太鼓に似ていると私は考えていました。強くたたくほど強く響く、と。だから、生徒には厳しく接しました。同窓会ではいつも「先生にはいろいろやられた」と昔話に花が咲きます。

ただ、生徒はどんなに怒られても、はい上がろうとしました。成績の悪い生徒ほど、早朝から問題集を抱えて職員室前の廊下で私の登校を待っているんです。昼休みも質問攻めで、こっちは食事をする暇もありません。でも、そういう生徒ほど、私も驚くくらい大きく伸びたものです。

怒られても、けなされても、それでも生徒が教師の元から離れていかないのは、生徒にとって「収穫」があるからです。もしも得るものがなければ、生徒は決してこちらには来ません。だから、私は高橋先生にも「生

撮影◎群馬県立太田高校にて

右 よしはら・かずお　太田工業高校、桐生工業高校を経て、太田高校へ。同校で17年間教壇に立ち、1994年退職。その後もさまざまな高校で講師を勤める。

左 たかはし・ひろし　数学科。館林高校に9年間勤務した後、太田高校へ。同校で12年間勤務。そして伊勢崎高校へ転任。5年目を迎える。

学びました。まず、生徒を見ることの大切さ。集中力が途切れそうなタイミングで、ふと授業の流れを変えて、生徒を再び引き付ける。この感覚は相変わらず絶妙でした。しかし、同じ教師となってみて、分かったことは、吉原先生が教材研究など授業の準備を入念に行っていることでした。そしてそれは、授業だけではありません。先生は入学前の1年生の名前を覚えてしまい、気軽に生徒に声を掛けました。厳しい指導でも生徒を引き付けてやまないその魅力の秘密は、こうした地道な努力にあるのだと気が付いたのです。

私はもちろん、ほかの数学科の先生も、吉原先生に遅れを取るまいと、教材研究などに一生懸命取り組みました。ほかの進学校から転任された先生が「ここに来て前よりも10倍忙しくなった」と驚くほどでした。でも、正直つらいとは思いませんでした。「太田高校の躍進を支えているのは自分たち数学科だ」という自負がありましたし、生徒も「うちの学校の数学はすごいですよね」とよく言っていました。だから、感じるのはつらさではなく、やりがいでした。

「授業は、生徒が背伸びして届くレベルで」「上位3分の1の生徒を基準に授業せよ」。いずれも吉原先生から学びました。そして、そんな授業でも生徒が脱落せずついてくるという事実。まさに神業です。成績が振るわない生徒ほど吉原先生に質問し、成績が360人中350番の生徒が一橋大に現役合格する。あきらめない気風があの頃の生徒にはありました。「吉原先生に習って分からないのなら……」という言葉は、生徒たちの覚悟だったのでしょう。

私が母校に赴任して2年目に、吉原先生は定年退職されました。先生と働いたのは1年間だけでしたが、私には夢のような1年でした。退職の際、先生は私に愛用の指し棒を譲ってくださいました。太田高校を離れた今、年季の入ったその指し棒を見た生徒に「それ、どうしたんですか?」と聞かれることがあります。そんな時、私は「数学の神様から『しっかりやれよ』と授かったんだよ」と答えるんです。

私の教え子も既に10人以上が数学教師の道を選びました。現任校でも教え子の1人が「高橋先生のような数学教師になりたい」と数学科に進んだんです。吉原先生から学んだことを、次の世代に伝えられているのかなと、とてもうれしく思いました。

徒が質問に来なくなったら、それは生徒から見限られたということだぞ」と話しました。そして、新任の先生がどのような授業をしているか、必ず見に行っていました。高橋先生の授業を見て、力のある先生が来てくれてよかったと安心しましたし、母校の後輩を弟のように見守るその姿勢をうれしく思いました。

生徒はこちらが本気で怒ったことは、必ず意図を理解してくれました。「お宅の生徒が問題を起こした」と学校外から連絡を受けた時は、急いで現場に駆けつけるや、心の底から本気で生徒を怒りました。相手に謝罪するだけでなく、私が目の前で本気で怒るからこそ、その場が収まることもある。それは学校も社会も同じです。そして怒られた生徒も後日「あの時はお世話になりました」と礼を言いに来たものです。生徒も、こちらの思いを確実に受け止めてくれていたんです。

生徒が教師の言葉、教え、そして怒りをしっかりと受け止められるかどうか。やはりそれは、教師が生徒に「収穫」を予感させることができるかどうかにかかっています。学校全体が頑張った先を見通して一致団結していれば、どんなに苦しくても生徒はついてくるはずです。

※プロフィールは取材時（09年4月）のものです

SPECIAL ISSUE

特集

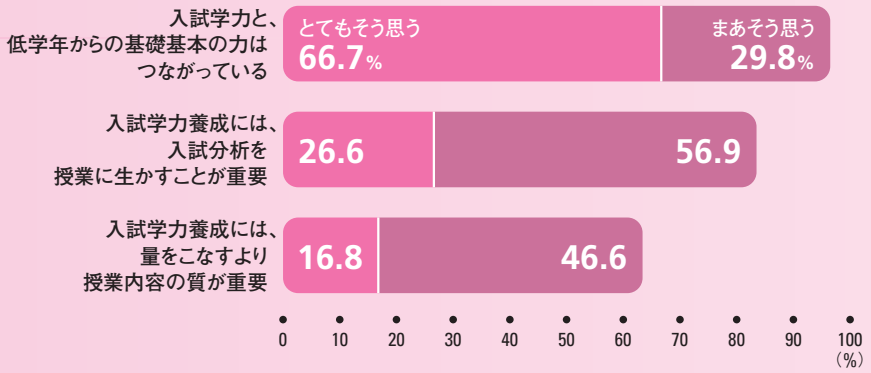
「大学入試分析」を生かす

各高校では大学入試をどのように分析し、活用しているのだろうか。
全国の高校教師へのアンケート結果による現状報告とともに、実践事例を紹介する。

「入試学力」と「低学年からの基礎基本の力」はつながってますか？

『VIEW21』高校版「大学入試と進路指導に関する教師アンケート」より

※調査概要はP.6参照



「入試学力」は「低学年からの基礎基本の力」とつながっていると回答した教師は、96.5%に上った。また、「入試学力養成には入試分析を授業に生かすことが重要」と答えた割合も、8割を超えた

1 高校での大学入試分析の現状

『VIEW21』高校版「大学入試と進路指導に関する教師アンケート」調査結果 …… P.6

◎大学入試分析を実施する高校は、約9割
（「校内組織で実施」+「個人レベルで実施」）

◎「入試問題分析」を組織的に実施する高校は、3 割弱

◎分析結果を「入試対策用の補習や課題の内容に反映する」が最も多く、9 割

◎分析結果を定期テストや教科書選定に反映させている学校は、5 割未満

◎入試分析を組織的に行う学校は、結果を教師間で共有したり、
学校全体の指導体系に反映するだけでなく、
校内テストの出題内容や教科書選定に反映している割合も高い

2 具体的な指導への生かし方

成果が上がった背景を分析
低学年時からの学力と大学入試結果との関連を探り、指導に生かす
山形県立山形南高校 …… P.9

難関大入試問題の要求学力を分析
生徒向け「大学入試問題研究」を通し、教師の教科指導力を高める
愛知県立刈谷高校 …… P.12

センター試験後に生徒の個別学力試験の力を教師全員で分析
「北高ボーダー」をつくり、合格可能性を教師全員で分析
長崎県立長崎北高校 …… P.15

3 なぜ大学入試分析が必要なのか

インタビュー 前・島根県立益田高校校長 **柴田 博** …… P.18

大学入試問題は、大学教育と高校教育を結ぶ太いパイプ

先進的な理論や研究も、確かな基礎学力の延長線上にある

校内テストの作問ノウハウは、入試問題分析の深さと比例して進化する

「長時間集中できる生徒」「得点で合否が決まる現実を受け止められる生徒」の
育成が必要なことが入試問題分析を通して実感できる

調査結果

高校での大学入試分析の現状

『VIEW21』高校版「大学入試と進路指導に関する教師アンケート」より

『VIEW21』編集部は、2009年3月、大学入試と進路指導に関するアンケート調査を実施した。その中から、大学入試分析にかかわる調査結果を紹介し、高校現場ではどのように大学入試分析が行われ、指導に生かしているのか、その現状を見ていく。

大学入試分析を実施する高校は約9割

図1は、大学入試分析の方法について、「合格、不合格者の分析を行う」「入試結果のポイントを整理する」「入試問題の傾向や要求学力を分析する」の3つに分けて尋ねた結果だ。どの項目でも「校内組織で実施」と「個人レベルで実施」を合わせると、約9割の高校で実施している。ただし「入試問題の傾向や要求学力を分析する」は「校内組織で実施」よりも「個人レベルで実施」のほうが多い。

図2は、入試分析結果をどのよう

図1 大学入試分析の方法

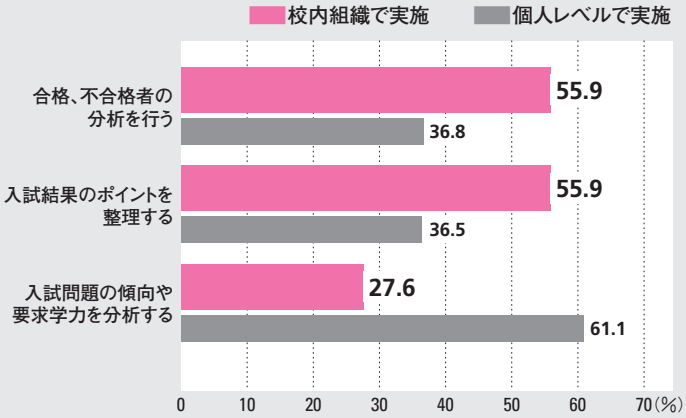
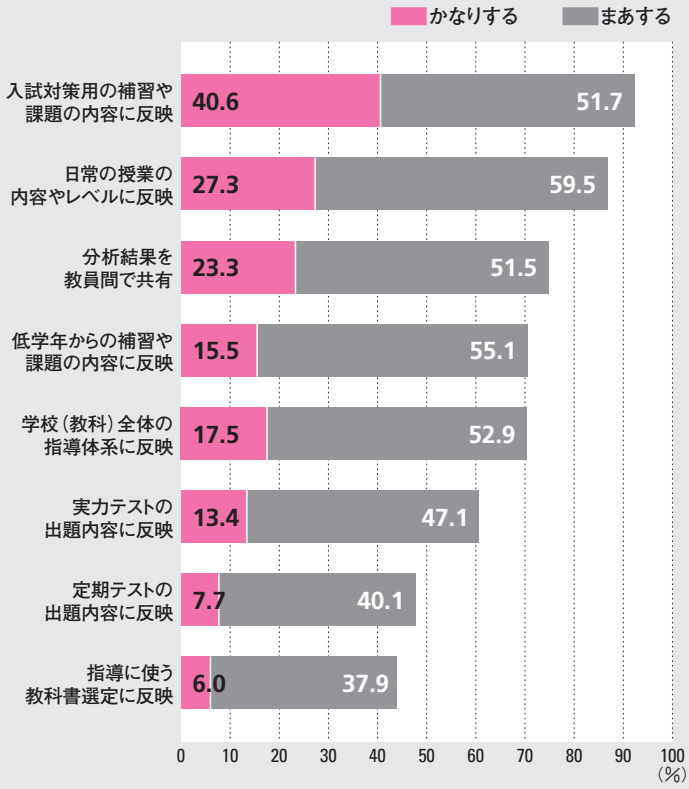


図2 大学入試分析の生かし方



『VIEW21』高校版「大学入試と進路指導に関する教師アンケート」調査概要

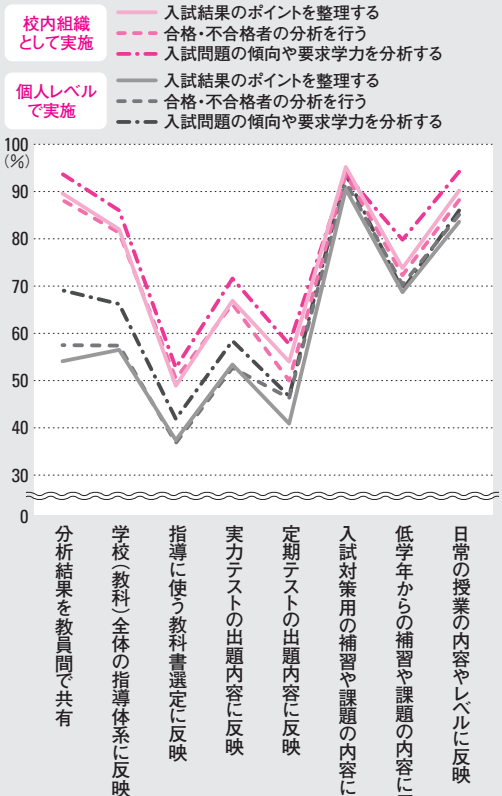
調査主体　『VIEW 21』高校版
調査方法　学校への郵送による自記式質問紙調査
調査対象　大学進学者が多い全国の高校の進路担当教師　（対象校数2085校、有効回答数805校）
調査時期　2009年 3 月

に活用しているのかを尋ねた結果だ。実施率（「かなりする」＋「まあする」）が最も高いのは「入試対策用の補習や課題の内容に反映」で、9割以上だ。一方、「指導に使う教科書選定に反映」は最も実施率が低く、4割強。「定期テストの出題内容に反映」や「実力テストの出題内容に反映」の実施率は5～6割程度だった。

図3は、入試分析に組織的に取り組む場合と、個人レベルで取り組む場合とで、分析結果の活用（実施率）に差があるかを調べた結果だ。それによると、「分析結果を教員間で共有」「学校（教科）全体の指導体系に反映」で実施率に大きな差があり、定期テストや実力テストへの反映でもほぼ10ポイント以上の差がついた。

自由記述回答には、学校でのさまざまな入試分析の工夫が読み取れた。「組織的にどのように教師のスキルや分析の精度を高めるか」「分析結果を入試直前の対策だけでなく、低学年からの指導にどのように反映させていくことができるのか」などが課題のポイントのようだ。

図3 取り組み別に見た「入試分析の生かし方」



課題 自由記述回答より

組織として取り組めていない

- 学年別に分かれている教科が多く、3年生に関係しなかった教師の意識が薄い
- 分析を横（学年）だけでなく、縦（全校）でも共有し、校内での指導体制をより組織的にする必要を感じる
- 成績低迷時の分析が互いに気を使い思い切った分析にならない
- いわゆる進学校ではないので、「教師集団」としての機能が弱い。学校の目的、指導の在り方などを徹底的に検討すべき

分析のスキルや精度を高めにくい

- 進路先の幅が広く、分析の焦点が絞れない
- 生徒の学力層が幅広く、分析すべき大学のターゲットを絞り切れていない
- データがあふれているが、何を軸にどのようにまとめるか迷う
- 判定と合格・不合格の整合性。分析の精度を高める
- 分析結果と校内偏差値の関係の精度が高くない
- 受験生が少なく、データとしての信用性が低い
- 生徒の実力差で指導する方法について、更なる分析力向上
- 模試結果などから、個別学力試験での生徒の実力を予想する精度を高める

分析結果を生かしきれていない

- 入試分析結果を、日常の授業や課題にしっかり反映できていない
- 保護者への説明をもっと早期に、もっとタイムリーに行う
- 教師の作問力向上
- 入試の傾向や要求学力に対して本校のカリキュラムと補習の内容が合っているのかを検証し、効果的なものにしたい
- 継続的な取り組みを続け、ノウハウを蓄積する
- 分析は行っているが、その情報の活用力に関して教師間に差がある

各校の具体的な取り組み 自由記述回答より

入試問題を分析

- 問題内容の傾向や難易度を分析し、それを基に校内模試の作問や演習を進めている
- 地元国公立大の入試を解いて出題の意図を探り、対策を練る
- 入試問題の教材化
- 正答率の低い問題を分析している

入試結果と生徒の実態の関連を分析

- 個別学力試験の得点開示の情報を生徒から集め、実力テストとの相関を見て指導に生かしている
- 模試の成績推移、センター試験などの入試結果を基に、教科担当の反省と次年度へ活用すべき項目を引き継ぐ
- 模試の2・3年生での伸び・落ち込みの分析と入試結果とを比較
- 合格した生徒と不合格だった生徒との違いを分析し、1・2年生にさかのぼり到達目標の設定を見直す
- 合格者の学習への取り組みを見て、学習意欲の向上にどう生かしていくかを検討する

分析結果の報告や発表の場づくり

- 入試の総括を翌年度の4月下旬に実施し、早めに前年度の反省をしている
- 保護者会用資料、教師用の詳細なデータをつくる
- 新旧担任連絡会議で、旧3年生担任からの資料を基に質疑する
- 職員会議で結果を報告し、進路指導部の分析を提示する。授業担当を集め、結果から見た生徒の学習状況や改善の方向性などを話し合う会議も前年度から開いている
- 教師間だけでなく、3月末の学年集会で、3年生担任が他学年生徒にも入試の分析結果を伝えている
- 3月に教師対象の進路学習会を開き、入試結果（合格・不合格）の分析を行っている

コラム

今春の入試結果の状況

『VIEW21』高校版　「大学入試と進路指導に関する教師アンケート」より

アンケートでは2009年度入試の状況についても尋ねた。その結果を報告する。

大学入試対策で最も大事なのは、「学習習慣の定着」

■図1は、生徒の志望校選びの傾向を尋ねた結果だ。「不況に伴う受験校数の絞り込み」「不況に伴う現役志向・安全志向」の肯定率（「かなり見られた」＋「まあ見られた」）は6割前後だった。「センター平均点ダウンに伴う安全志向」の肯定率は、約5割だった。

■センター試験の問題内容に「新しい傾向がみられた」に「そう思う」と回答した割合は約2割（図2）。自由記述回答を見ると、「国語・英語の文章量が増え、速読の力が求められるようになった」という声が多かった。「生徒の学力を測る良問が多かった」に「そう思う」と回答した割合も約2割で、自由記述回答には、「知識を問うよりも思考力を問う良い問題」「単なる詰め込みや暗記では対応できない」「点数差が生徒の実力差にある程度比例していた」などの声があった。

■入試で実力を発揮した生徒とそうでない生徒の違いを尋ねたところ（図3）、質問項目すべてにおいて「とてもそう思う」＋「そう思う」の回答が8割を超えた。「とてもそう思う」の回答のみに着目した場合、最も肯定率が高いのは「学習習慣が身に付いていた」で6割強だった。次に多かったのは「3年生の最後まで授業を大切にした」であり、教師は「授業」と「家庭学習」が入試においても最も大切な要素であると考えているようだ。

図1　生徒の志望校選びの傾向

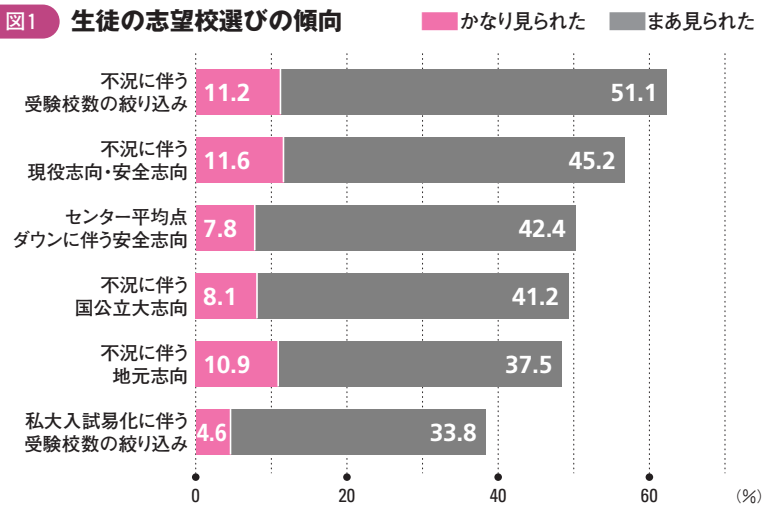


図2　センター試験の問題内容の分析

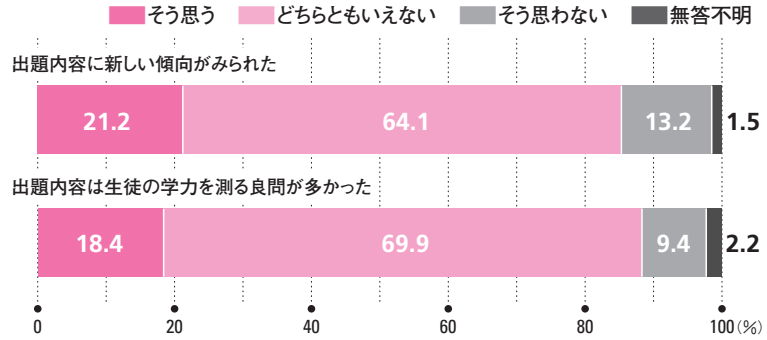
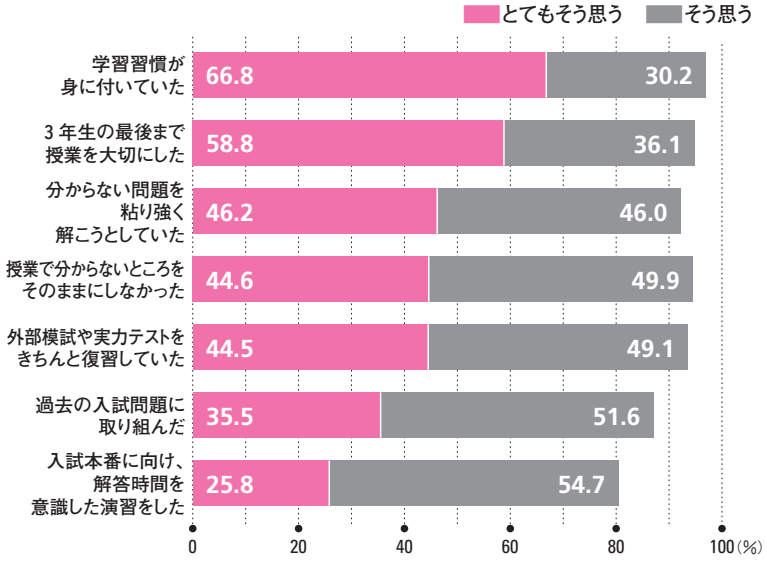


図3　入試で実力を発揮した生徒とできなかった生徒との学習面での違い



山形県立山形南高校

低学年時からの学力と大学入試結果との関連を探り、指導に生かす

山形県立山形南高校は、2009年度入試において、東北大に前年度の2倍となる26人が現役合格した。背景には、この学年の入学時から、東北大に照準を合わせた指導の積み重ねがあった。同校は今、この成績推移と指導との関係を分析し、今後の指導への生かし方を模索している。

東北大合格者数が倍増した

山形県立山形南高校では2009年度入試実績に大きな変化が見られた。国公立大の現役合格者は例年並みの163人だったが、その内訳が変わった。東北大に前年度13人の2倍の26人が合格したのだ。

同校では、センター試験後、志望校の出題傾向と本人の学力を考慮しながら、一人ひとりの合格可能性を分析している。09年度入試では、センター試験の5教科6科目型の平均点が前年度より20点ほど下がった。しかし、同校では約10点減にとどまり、このことが東北大出願を貫く生徒と教師の姿勢を支えた。当該学年を1年生から担任をしてきた進路指導部の遠藤淳一先生は、「この学年は、センター試験よりも個別学力試験対策を重視して指導してきました。それでも、センター試験で例年並みの結果が出た。CやD判定でも合格は十分可能だと考えました」と話す。

C判定でも、模試の実績から合格可能性が高いと判断できる生徒もいれば、B判定でも成績に波のある生徒もいて、センター試験後もきめ細かく指導した。そして予想通り、東北大合格者が過去最高となったのだ。

同校はこの躍進を今後の指導に生かすため、当該学年の1年生時からの学力を分析した。進路指導主事の森政行先生は次のように説明する。

「09年度の東北大入試は、例年と比べて数学が易しく、古典が難化していました。結果として、数学と国語では差がつきにくく、恐らく英語が合否を分けたと分析しています。今までは、合否の鍵を握る教科は数学

PROFILE

山形県立山形南高校

◎旧制中学の伝統を引き継ぐ進学校。制度上は共学だが、戦後の一時期を除き在籍するのは男子のみ。「創造的知性」「たくましく健全な心身」など4つの教育目標を掲げる。「文武両道」を校是とし、2008年度は全国大会に11の部（東北大会に14の部）が出場した。

設立　1941（昭和16）年

形態　全日制／普通科・理数科／共学　　生徒数（1学年）　約280人

09年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、山形大49人、東北大26人、新潟大18人、埼玉大11人など計174人が合格。私立大は、明治大、法政大、東京理科大、早稲田大などに延べ289人が合格。

住所　〒990-0034　山形県山形市東原町4-6-16

電話　023-622-3350

WEB PAGE　http://www.yamanan-h.ed.jp/

で、それを意識して1年生時から数学を軸に指導してきました。そこで、改めて入学時からの指導と成績推移などのデータを分析し、効果的な取り組みは何かを確かめました」

センター試験重視から個別学力試験重視へと変更

実績向上の大きな要因は、1年生時から東北大を見据えた指導を続けてきたことだ。同校で最も多い進学先は山形大だが、入学時には東北大を志望する生徒の方が多い。2年生3月時点でも90人近くいる。しかし、大半の生徒が部活動に打ち込み、高校総体県予選の終わる3年生の6月に本格的な受験態勢に入るため、その時点での学力は他校生に大幅な後れを取っている。実力がないまま、東北大対応型の模試を受けて自信をなくし、東北大をあきらめる生徒が多かった。例年、3年生の7月には50人に減り、実際に受験するのは30人程度で、合格はその半数だった。

「生徒が入学時に抱く東北大への夢をかなえてやりたいと思いました。しかも、東北大の個別学力試験は、高校での基礎学力をしっかり身に付けていれば解ける問題ばかりです。本校の生徒にはその力が十分あると思いました」と、1年生時から担任をしてきた柴田雅樹先生は話す。

従来の指導はセンター試験重視だったが、個別学力試験重視に切り替えた。東北大は個別学力試験の配点比率が高いという理由の他に、センター試験対策でも個別学力試験対策が効果的と考えたからだ。柴田先生は担当教科の数学を例にこう話す。

「センター試験の数学は、標準的な問題ばかりですが、制限時間に対して問題量が多い傾向にあります。ミスなく速く解く力が高得点の鍵ですが、その力を付けさせるにはできるだけ多くの演習を積ませるのが有効だと考えました」

英語についても同様だと、遠藤先生は指摘する。

「一つひとつの問題は難しくありませんが、設問量が多い。解答に必要な情報をいかに素早く見つけ出すか、情報処理能力が問われています。また、英語の感覚を問われるような出題も増え、コミュニカティブな英語力を測る傾向が強まっています。対策として、演習量を増やす必要がありました」

例年は3年生2学期からセンター試験対策を行うが、この学年はセンター試験1か月前まで個別学力試験対策の演習を積み、センター試験対策は1か月間に集中して行った。

東北大の入試問題に1年生時から取り組ませる

東北大を目標に個別学力試験対策重視を指導方針に掲げたが、部活動引退までに基礎学力を身に付けていなければ東北大合格は厳しい。そこで数学と英語では1年生から3年生の1月まで毎日1枚のプリントを課した。特徴は、状況に応じた内容を、数学は50分程度、英語20分程度で終わる量として毎日作成したことだ。

生徒の大半は、部活動で帰宅が夜遅くなる。まとまった学習時間を確保するのは現実的に無理があり、自主的な予習や復習は望めなかった。そこで、プリントは朝でも昼休みでも取り組んで提出すればよいことにし、短時間でも机に向かう習慣を付けさせようとした。また、授業と家庭学習の連動を図るため、授業で取り上げた問題の類題やつまずいた問題の詳細な解説など、その日の授業に関連が深い内容とした。学校行事等で生徒に疲れが見えた時などは、課題を出さなかったという。

「これさえやれば力が付くから、どんなに疲れていてもきちんと取り組むようにと、生徒には繰り返し伝えました。定期考査や模試でその成果を実感し、生徒は次第に楽しみながら取り組むようになりました」と、3年生担任の奥山浩之先生は話す。

プリントには東北大など難関大の入試問題を織り交ぜた。その時点での学力で取り組める問題を選び、難関大は決して手の届かないものではないと実感させる。難度の高い問題の時には、裏面に解答・解説を載せ、それを見ながら解かせた。

「東北大の入試問題は、1年生時から授業などでも取り上げました。入試問題はその力が付いてから解くのではなく、最初に見せることが大切だと思います。『これが解ければ合格できる』という具体的な目標に

なります」（柴田先生）

偏差値の堅調な推移が意欲の維持につながる

同校では例年、模試の偏差値は学年が上がるごとに下降線をたどり、入試直前に落ち込んだ分を取り戻す、というのが特徴だった（**図1**）。ところが、この学年は毎日のプリントの成果もあり、基礎学力の定着度が高く、1年生から2年生、2年生から3年生の進級時に偏差値が下がらなかった。これも躍進に大きな影響を及ぼした。

「1年生時から東北大の入試問題に慣れさせたこと、偏差値がキープできたために、あきらめる生徒が少なかったことが、学年全体として高いモチベーションを保てた大きな要因です。毎年、東北大を狙える実力がありながら私立大の指定校推薦入試に変える生徒が一定数いましたが、この学年には易きに流れる雰囲気がありませんでした」（遠藤先生）

その好影響を受けたのが国語だ。寺崎昌尚先生は、国語では例年以上に充実した指導ができたと話す。

「3年生の6月からは放課後に課外講座を開きますが、例年は東北大文系志望者が大幅に減ってしまうため、国語の東北大講座を開けませんでした。しかし、この学年は東北大志望者数がほぼ維持できたため、国語の講座を設定できました。個別学力試験対策を組織的に指導できたのは大きかった。生徒にとっても同じ志望校の仲間と学習でき、良い動機付けになったようです」

授業にしっかり取り組ませれば東北大入試は十分に勝算があると判断したのは教師個々の経験則だったが、それに基づいた指導は09年度入試で大きな実りとなった。この経験は、入試結果を分析し、指導に生かす重要性を改めて感じさせてくれたと、森先生は話す。

「教師に必要なのは、入試問題の出題傾向を自校の生徒に合った指導にどう反映させるかという視点で分析する力です。この経験を学校全体で共有し、組織的な指導に結び付けることが、本校の今後の課題です」

山形県立山形南高校（09年4月から新庄北高校最上〔もがみ〕校教頭）
森 政行 Mori Masayuki
教職歴30年。同校赴任歴3年。進路指導主事。英語科。

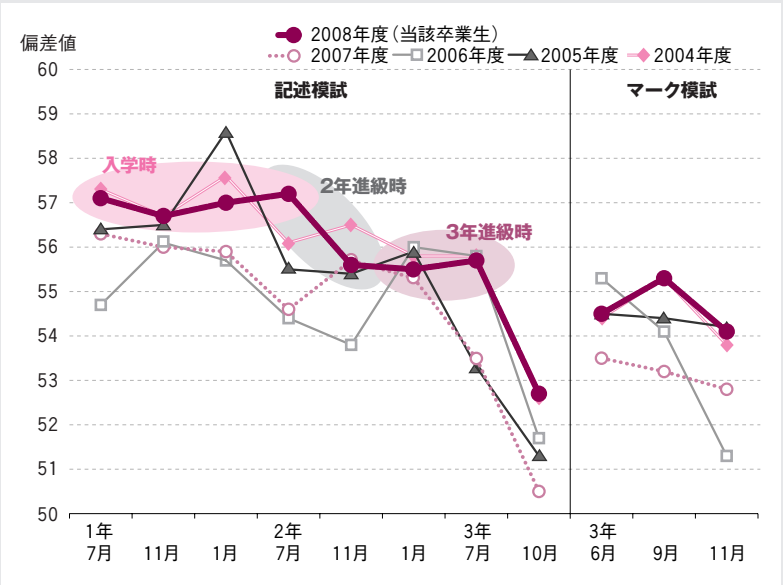
山形県立山形南高校
遠藤淳一 Endo Junichi
教職歴20年。同校赴任歴14年目。進路指導部。3学年担任。英語科。「教師側の自己満足で終わりたくない」

山形県立山形南高校
寺崎昌尚 Terasaki Masataka
教職歴29年。同校赴任歴8年目。進路指導部。3学年担任。国語科。「意欲を持ち続ける指導をしていきたい」

山形県立山形南高校
柴田雅樹 Shibata Masaki
教職歴22年。同校赴任歴4年目。3学年担任。数学科。「自信を付けさせようと、模試の対策も行いました」

山形県立山形南高校
奥山浩之 Okuyama Hiroyuki
教職歴14年。同校赴任歴6年目。3学年担任。数学科。「1・2年生の指導をもっと充実させたい」

図1 卒業年度別 平均偏差値の推移（英語）



＊「2008年度第3学年英語成績分析資料」（山形県立山形南高校）より抜粋

＊プロフィールは取材時（09年3月）のものです

学校事例 2

愛知県立刈谷高校

生徒向け「大学入試問題研究」を通し、教師の教科指導力を高める

「東大入試研究会」「スプリングセミナー」など、生徒への早期の意識付けと入試を意識した授業で、高い進学実績を上げ続けている愛知県立刈谷高校。一連の取り組みは、教師の教科指導力、入試問題分析力の向上に結び付いている。

入試対策を通して教師の指導力を高める

愛知県立刈谷高校は、例年7割前後が国公立大に合格する県内屈指の進学校だ。2009年度入試では、東京大合格者が現役・浪人合わせて20人と、過去最高の実績となった。国公立大を意識させる進路指導を徹底した結果、最終的に志望校を下げたり、私立大に流れたりする生徒がほとんどいなかったことが背景にある。

難関大合格に向けた徹底的な個別学力試験対策が、着実に成果を上げたことも大きい。「なすべきことにきちんと取り組んでいれば、おのずと成果は出ます」と、進路指導主事の神谷久先生は言う。そして、この対策こそが、高い実績を支え、同時に教師の指導力向上にも結び付いている。入試対策を通して、同校の教師がいかに教科指導力の向上を図っているかを見ていく。

入試対策の最初の山場は、2年生の2学期に希望者生徒を対象として実施する「東大入試研究会」及び3学期に2年生全員を対象に実施する「名古屋大入試研究会」だ。同校では2年生の2学期を「受験生への切り替え・進路選択」の重要な時期とらえており、入試研究会もその取り組みの一環だ。両大学の入試問題の内容や出題傾向、授業への心構えや必要な教材など、教科ごとに入試のアウトラインを概説する。

この時、教科の代表者1人が講義をするのだが、次年度に同校で初めて3年生担任となる教師がいれば、ほぼ必ずこの役を割り当てられる。担当者は入試研究会の2週間くらい前から、過去問などの参考資料を読み、実際に問題を解きながら大枠をつかむ。その上で、入試問題の要求学力や指導のポイントをベテラン教師や3年生担任経験者に確認し、ノウハウや受験指導に対する考え方を

PROFILE

愛知県立刈谷高校

◎「質実剛健」を校訓として、飾りけがなく、まじめで、心身共に強くたくましい人材の育成を目指す。生徒・保護者・職員が一体となっての進路指導の体制を確立。部活動も盛んで、特に「赤ダスキ」のサッカー部は全国大会に何度も出場し、その名を全国に知られている。

設立　1919（大正8）年

形態　全日制／普通科／共学　　生徒数（1学年）　360人

09年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、東京大20人、名古屋大68人、京都大10人、大阪大12人など計275人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、南山大などに延べ568人が合格。

住所　〒448-8504　愛知県刈谷市寿町5-101

電話　0566-21-3171

WEB PAGE　http://www.kariya-h.aichi-c.ed.jp/

共有する。

「いずれ3年生の担任になれば、難関大受験に向けた指導をせざるを得ません。生徒だけでなく、教師もできるだけ早く東京大・名古屋大の入試問題に触れておく必要があるのです」と、神谷先生は説明する。

問題の解き方よりも思考法の指導を重視

次の大きな山は、3年生進級時の春休みに実施する「スプリングセミナー」だ。希望者を対象に（実際には部活動がある生徒以外はほぼ全員参加）、終業式の翌日から5日間、90分×4コマずつで、東京大や京都大などの難関大の入試問題を用いて演習に取り組む。

もちろん、この時点で東京大の問題が解ける生徒はほとんどいない。「10か月後の入試本番までに同レベルの問題を解けなければ合格できない」という生徒へのメッセージであり、これから本格化する受験勉強のシミュレーションでもある。セミナーを指導するのは、新3年生の教科担当を中心に、国、地歴、公民、数、理、英のほぼすべての教師。

セミナーを初めて担当する教師がまず戸惑うのは、問題の選び方だ。その大学の特徴を端的に表す良問を選び、生徒に提示しなければならない。実際に問題を解かせた後は、出題意図や陥りやすいミスなどについて解説する。

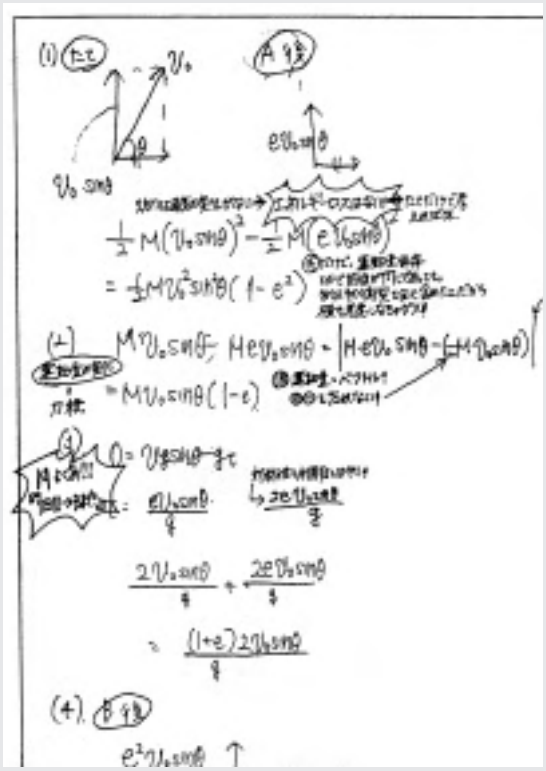
「このセミナーは、いかに点数を取らせるかということが指導の目的ではありません。大切なことは、出題者が何を問おうとしているのか、解答するためにはどのように考えればよいのかという思考法を伝えることです。そのため、生徒が解くことで思考力が培われる『良問』を選ぶ目が求められます」と、神谷先生は話す。

問題文に隠されたヒントを探り出し、その時点で持っている知識と結び付けるという思考法を習得しなければ、難関大の問題には太刀打ちできない。新任・転任の教師は、その思考法を自分自身でよく理解した上で、いかに生徒に伝えるか知恵を絞り、ベテラン教師のアドバイスを受けながら、受験指導に必要な問題分析力・指導力を高めていくのである。

目標と素材は共有しつつ指導は教師の個性を生かす

3年生になると、こうした学校行事としての入試分析の機会はなくなるが、逆に毎日が分析力向上のため

図1 生徒の口述筆記ノート



「スプリングセミナー」における教師の解説をメモした生徒のノートの一部。生徒の記述から、教師の入試問題分析のきめ細かさがうかがえる

愛知県立刈谷高校
神谷 久 Kamiya Hisashi
教職歴25年。同校赴任歴16年目。進路指導主事。数学科。「生徒が基礎基本を身に付けられる指導をしたい」

愛知県立刈谷高校
大須賀義弘 Osuka Yoshihiro
教職歴29年。同校赴任歴4年目。進路指導部。英語科。「狭い英語力にとどまらず総合力を身に付けさせたい」

 ＊プロフィールは取材時（09年4月）のものです

の研修になる。進路指導部の大須賀義弘先生は、次のように説明する。

「演習問題は学年共通で使うので、『あの問題はどのように説明したか』『生徒はどの程度理解できたか』といった会話ができるようになります。そうした議論を日常的に行うことによって、ノウハウの伝達や教師同士のコンセンサス、分析力の向上につながるのです」

教師間で目線合わせやノウハウの共有は行うが、指導法の統一まではしない。「生徒の得手不得手や理解度、感性は一人ひとり違います。また、生徒にも『A先生の教え方が自分には合っている』『B先生の説明は分かりにくい』など、好みや相性があります。教師それぞれの個性を生かす方が、生徒の持つさまざまな要望にも対応できるのです」と、大須賀先生は強調する。

生徒の成長が、教師の指導技術の向上を促すことも多い。10月ごろになると、生徒の学力も大きく伸び、教師が予想もしないような鋭い質問が出てくる。

「我々が即答できない質問を投げ掛けてくることもよくあります。教師も生徒に鍛えられ、生徒と共に成長していくと感じます」と大須賀先生は言う。2年生後半からの1年半は、生徒のみならず教師にとってもステップアップのための好機なのだ。

こうした厳しい状況の中で入試対策を経験した担任は、1年生からの積み重ねの大切さを痛感するという。

「基礎学力に加え、読解力や推理力、理解力など、土台となる力をしっかり身に付けていなければ、3年生でいくら演習をこなしても力は伸びません。本校で初めて3年間を持ち上がりで経験し、改めて1年生時の指導の大切さに気付きました」（大須賀先生）

09年度入試分析から見えてきた課題

鍛えられた高い分析力により、入試傾向や要求学力を読み取り、指導改善につなげていることも同校の強みだ。大須賀先生は、09年度入試の英語を次のように総括する。

「センター試験の英語については、出題者が新学習指導要領をかなり意識していると感じました。難解な単語や文法こそないものの、長文の分量が増え、英語を英語のまま読み、瞬時に意味を把握する力が問われています。リスニングに関しては、付け焼き刃の対策では高得点が望めない内容でした。いずれも『使える英語』を目指す新学習指導要領をにらんだ試験問題だったと思います。

長文読解問題については、センター試験対策に偏りすぎると、かえって難関大の個別学力試験で出題されるような長文がじっくり読めなくなる可能性があることを、教師間で共通意識を持つ必要があります。リスニングに関しては、もし、本気で対策に取り組むなら、1年生からの指導を根本的に変える必要があるでしょう。特に、大事なのは2年生。現行の教育課程では1年生でOC（オーラル・コミュニケーション）があり、3年生はライティングの中でヒアリングも扱うので、空白となる2年生の指導をいかに工夫するかが問われると思います」

東京大の英語は、例年通りのよく練られた問題だったという。09年度の要約問題は、アメリカの「ラッキーペニー」をテーマとする文章だった。ペニーは1セント銅貨の別称だが、「ささやかだけど大事なもの」のたとえとして用いられた。設問自体はそれほど難しくはないが、「ペニー」が比喩（ゆ）であることを読み取れなかった生徒には全く理解できなかったかもしれないと、大須賀先生は指摘する。文学的な文章の読解力や感性が求められる良問だったが、それだけに、生徒には英語力にとどまらない総合的な力が求められる。

「国語が不得意な生徒は、数学にせよ、英語にせよ、一定以上の難問には歯が立ちません。多くの読書体験やさまざまな生活での経験が必要なのです。そうした経験の大切さを生徒に繰り返し伝えたり、低学年時から読解力の向上に取り組んだりといった、地道な取り組みを続けていくしかありません」と、神谷先生は力説する。

地道な入試問題分析が、授業改善へのヒントをもたらしていることがうかがえる刈谷高校。入試分析が単なる受験対策にとどまらない教育的営みであることを、改めて感じさせてくれる。

長崎県立長崎北高校

「北高ボーダー」をつくり、合格可能性を教師全員で分析

長崎県立長崎北高校は、「北高ボーダー」と呼ばれる学校独自の合格基準値を作成し、志望校検討の重要なデータにしている。入試問題分析に裏打ちされた客観的な情報と、生身の生徒の情報を勘案し、教師全員で生徒一人ひとりの合格可能性を探る手法を紹介する。

丁寧な志望校検討が高い進学実績を支える

2009年度国公立大入試、前期日程87%、後期日程86%――。これは、学校独自の合格基準値である「北高ボーダー」によって合格を見込まれた生徒の合格率だ。「生徒と何度も面談を重ね、生徒が納得した上で志望校を決めています。生徒にとっても、ボーダーを設定した我々にとっても、この合格率は納得のいく数字ではないでしょうか」と、進路指導主事の平塚雅英先生は振り返る。

長崎県立長崎北高校は、例年200人近い現役国公立大合格者が輩出する進学校だ。成績上位層の多くが地元の国公立大を中心に、広島大、熊本大などを志望する。安定した実績を支えているのが、「北高ボーダー」を基にして志望校を絞り込む入試分析力だ。もちろん、数字だけを頼りにするわけではない。「北高ボーダー」を基本としながら検討会と面談を複数回行うことによって、生徒・保護者が共に納得し、かつ合格可能性の高い志望校を探す。

センター試験後の「北高ボーダー」作成から、志望校検討会、面談までの一連の流れは次の通りだ。

まず、センター試験終了後の最初の木曜日、3年生の学年団及び進路指導部が手分けをして、ベネッセほか3社の自己採点集計説明会に出席し、情報を収集。同夜、各社のデータを突き合わせて「北高ボーダー」を設定する。翌日、学級別に1回目の志望校検討会を開き、その結果を基に土・日に二者（保護者の希望によっては三者）面談を行う。続いて、火曜日に校長、教頭、学年団、教科

PROFILE

長崎県立長崎北高校

◎「両道顕揚（けんよう）」を校是として、学習と部活動、豊かな学識と社会性の両立を目指す。進学実績を安定して上げ、例年高い入学倍率を維持する。部活動も盛んで、ラグビー部やバレーボール部、ソフトテニス部、放送部などが全国大会で活躍。

設立　1964（昭和39）年

形態　全日制／普通科／共学　　生徒数（1学年）　280人

09年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、長崎大53人を始め、名古屋大、神戸大、広島大、九州大、熊本大などに189人が合格。私立大は、関西大、関西学院大、同志社大、西南学院大、福岡大などに述べ363人が合格。

住所　〒851-1132　長崎市小江原1-1-1

電話　095-844-5116

WEB PAGE　http://www7.ocn.ne.jp/~ngs-kita/

図1　2009年度入試での出願校決定までの流れ

1月17日(土)18日(日)	センター試験
1月22日(木)	各社のセンター試験自己採点集計説明会後、直ちに「北高ボーダー」作成
1月23日(金)	学級別検討会(1回目)
1月24日(土)25日(日)	二者(三者)面談(1回目)
1月27日(火)	全体検討会
	学級別検討会(2回目)
1月28日(水)	二者(三者)面談(2回目)

団、進路指導部の教師が一堂に会した検討会を開き、その夜に2回目の学級別検討会を実施。それを受けて、水曜日に二者面談を行い、最終的に出願校を確定する（**図1**）。

「北高ボーダー」の作成を通し「感覚としての勘」を磨く

一連の検討会の基となる「北高ボーダー」を作成する大学は、生徒の志望校と、過去に同校から進学実績のある大学で、九州・中国・四国・関西を中心に全国の国公立大の約3分の2を網羅する。作成に携わる教師は、進路指導部を中心に1・2年生の担当教師も含めて30人。09年度入試では、関東・関西、中国、四国、北九州、南九州の5グループに分かれて作業をした。3年生の担任は学級の生徒を個別に検討するため、ボーダー作成には参加しない。

作成の手順は次の通り。各社のデータが集まったら、傾斜配点でのBラインをボーダー表に記入する。各社で算定基準が異なるため、同じ学部・学科でもA社は615、B社は560と、大きな開きが出る場合もある。その時は客観性を高めるために、センター試験の平均点、各社の過去数年分のボーダーと実際の入試結果との比較、過年度生の達成状況、更には各社のボーダーの決め方の傾向や当該年度の特殊要因を加味しながら、学校独自のボーダーを設定していく。

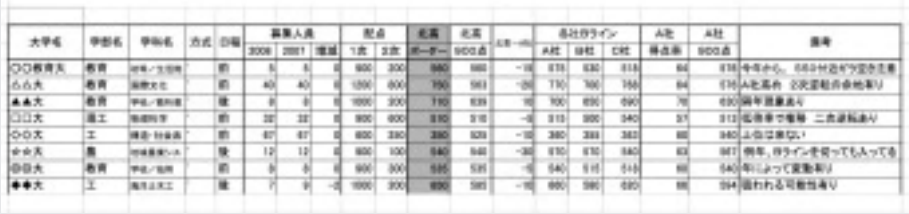
ただ、いくら客観的なデータを積み重ねても、個々の大学の出願動向など、この時点では予測しきれない要素がある以上、完璧なボーダーを設定できるわけではない。同校で長年、進路指導主事を務めてきた南昌伸先生は、次のように語る。

「そもそも、各社のボーダー自体が出願者数に影響を及ぼしますから、そうした不確定要因を踏まえて合格可能性を探る『読み』が必要です。可能な限りデータを集めて検討していますが、最後にものを言うのは、長年の経験に基づく『勘』です。それは根拠のない『直感』ではなく、データや経験に基づく『感覚の勘』とでもいうべきものです。そうした勘を磨くには、何よりも経験が必要。毎年、3年生以外の教師にも参加してもらうのは、なるべく多くの実践を積み重ね、分析に必要な『感覚』を研ぎ澄ましてもらいたいからです」

生徒の人間性に迫ることでより精密な分析が可能に

学級別検討会では、センター試験の結果と「北高ボーダー」、本人や保護者の希望、個別学力試験の力や性格も考慮しながら、生徒一人ひとりについて検討する。担任と副担任の他に1、2人が加わり、担任が若手教師の場合は、ベテラン教師や赴任歴の長い教師も加わる。学級別検討会の利点は、一人ひとりに時間をじっくりかけて検討できること。進

図2　「北高ボーダー」例



大学名	学部名	学科名	方式	日程	募集人員 2009	募集人員 2008	募集人員 増減	配点 1次	配点 2次	北高ボーダー	北高 900点	北高	各社ボーダーライン A社	各社ボーダーライン B社	各社ボーダーライン C社	A社 得点率	A社 900点	備考
○○教育大	教育	[illegible]		前	5	5	0	900	300	560	560	−10	615	630	615	64	615	今年から、[illegible]センター試験を利用
△△大	教育	国際文化		前	40	40	0	1200	600	750	563	−20	710	700	750	64	615	A社高め　公募推薦非会地募り
▲▲大	教育	学校／教科教		後	8	8	0	1000	300	710	639	10	700	650	690	70	630	募年度募集あり
□□大	工	機械科学		前	32	32	0	900	600	610	610	−0	610	600	640	67	610	広告塔で推薦　二次募集あり
○○大	工	建築・社会基		前	67	67	0	800	300	580	629	−10	580	580	580	60	540	上位は来ない
☆☆大	農	地域農業シス		後	12	12	0	800	100	640	640	−30	670	670	640	63	567	例年、B ラインを超えても入ってる
◎◎大	教育	学校／地域		前	5	5	0	900	300	535	531	−0	540	510	510	60	540	年によって変動あり
★★大	工	海洋システム工		後	7	9	−2	1000	300	600	595	−10	600	590	630	65	594	揺れわる可能性あり

「北高ボーダー」は、各大学の入試方式ごとに設定する。募集人員、センター試験と個別学力試験の配点、各社のBラインを記入し、過年度の合格点も考慮しながら、長崎北高校独自の合格ラインを割り出していく。これを基に、生徒一人ひとりの出願先を検討する

＊長崎北高校「北高ボーダー」を基に編集部で作成

路指導部の広田耕二先生はこう話す。

「全体検討会では、1人当たりの検討時間は長くても5分。一方、学級単位の検討会では、『本人は工学部志望だが、保護者が医療系を希望している』など、担任しか把握できないような情報を交えながら、一人ひとりの志望について深く掘り下げられます。学級ごとにベテラン教師が配置されるため、若手教師は迷いや悩みを相談して、経験に基づく有意義なアドバイスを得られます」

ボーダーより下でも、本人の志望や性格、個別学力試験の力などによってはあえて挑戦させることもある。

「生徒には数字では測れない可能性があります。データだけで判断しようとすると、それを見落としかねません。入試分析にはデータを読む力も大切ですが、データには表れない情報をしっかり読み取ることも欠かせません。普段から生徒と寄り添い、生徒の人間性にまで迫ることで、口に出しては言えないような悩みや希望、隠れた性格まで見えてくるのではないでしょうか」（南先生）

長崎県立長崎北高校
平塚雅英 Hiratsuka Masahide
教職歴23年。同校赴任歴6年目。進路指導主事。「生徒の志望実現に向けて、質の高い情報を提供し続けたい」

長崎県立長崎北高校
広田耕二 Hirota Koji
教職歴21年。同校赴任歴7年目。進路指導部。「生徒が後悔しないよう早期から意識付けをしっかりしたい」

長崎県立長崎北高校（09年4月から長崎西高校に転任）
南 昌伸 Minami Masanobu
教職歴30年。同校赴任歴15年。進路指導部。

生徒の個別学力試験での力を読みきること

学級別検討会後、1回目の二者（または三者）面談を行い、担任と生徒とで出願校をすり合わせ、全体検討会で全生徒の出願校を検討する。全体で行う利点は、データに基づいて客観的で冷静な検討ができることだ。

参加するのは、進路指導部、教科担任と大学入試に精通したベテラン教師ら、総勢約30人。「A大の経済学部の個別学力試験はこういう傾向がある。この生徒には厳しいのは事実だが、英語が伸びてきたので、個別学力試験で取り戻せる可能性は十分ある」といった多角的・総合的な判断が可能となる。ポイントは、教師が大学入試問題を深く把握した上で、生徒が個別学力試験で発揮できる力をどこまで読むことができるかだ。

担任は検討会の結果を持ち帰り、2回目の学級別検討会を経て、二者面談で出願校を決める。1人の生徒について多角的に何度も検討を重ねるだけに、最終的な結果に対する生徒や保護者の満足度は高いという。

全校体制の指導により入試分析の実効性を高める

同校の強みは、入試分析の精密なノウハウだけでなく、膨大な労力を必要とする取り組みを全校体制で進められる点にある。

「人海戦術に頼る面があるのは確かです。しかし一方で、一人ひとりの教師が、学校全体の一体感の醸成、若手教師の研修という面での成果を意識しています。それが、取り組みの実効性を高めると共に、形骸化も防いでいるのです」（平塚先生）

個別学力試験の合格発表時期には、1・2年生の教師も結果を注視する。教師の意識の高さの表れといえよう。

今後の課題は、3年間の指導の流れを整理し、早期から受験態勢を整えることだ。同校には部活動に全力を注ぐ生徒が多く、高校総体が終わって志望校を絞り込む段階で、必要な学力がないために志望のランクを下げてしまう生徒が毎年一定数いる。

「全国偏差値で50を切る生徒、『自分はもうあきらめた』と受験から背を向ける生徒を1人でも少なくしたいというのが、我々の強い思いです。入試を見越して、各学年・学期ですべきことを共有し、その過程を検証できるシステムの構築が急務と考えています」と平塚先生は強調する。

そのための素案は、ほぼできているという。低学年時からの入試を見据えた指導の充実が同校の課題だ。

＊プロフィールは取材時（09年3月）のものです

インタビュー

「高校生のため」の大学入試分析が、生徒の進路実現を保証する

生徒の志望進路、そして大学入試制度が多様化する中で、入試をどのように分析し、指導に生かすべきか。進路指導に長年携わってきた柴田博先生に「真に生徒のための入試分析」とは何かをうかがった。

前・島根県立益田高校校長　柴田　博
Shibata Hiroshi

入試問題は高・大を結び、その分析は指導の礎に

「大学入試に対応する学力は、日々の授業で獲得する学力とは異なり、入試問題を解くためには教科書では扱わない特別な知識やスキルが必要である」という声をかつて高校の教育現場でも聞くことがありました。しかし、入試問題は大学教育と高校教育を結ぶ太いパイプなのですから、その種の思いこみは大切なことを見失わせることにもなりかねません。

改めて各大学の入試問題を分析すると、大学が発信し、高校の教育現場がしっかりと受信すべきことがいくつか明らかになります。

例えば、大学が高校生にどのような学力を求めているか、言い換えると、高校で定着させるべき知識の質・量や、その活用にどのような能力がどの程度まで求められているかが分かります。東京大や京都大をはじめとする国公立大の入試問題を分析すると、出題者の先生方が高校の教科書をよく研究していることがうかがえます。「どんな先進的な理論や研究も、高校の教室で獲得する確かな基礎学力の延長線上にある」と私は考えていますが、同じ発想に基づいて入試問題は作られていると感じています。そのことに気付けば、私たちの授業は教科書の内容の理解と定着をまず主眼に置くべきだ、と自信を持って確認できるはずです。

また、入試問題分析の結果が共通理解され、具体的な到達目標や到達レベルが設定できれば、指導担当者が連携しチームとなって機能することが容易になります。定期考査や課題テスト、あるいは校内実力テストなどの作問ノウハウも、入試問題の分析の深さと比例して進化していくはずです。

更に、入試問題は、90分から120分という長時間にわたり集中力を切らさず「脳細胞に汗をかくことができる生徒」と、自己努力の評価指数とも言える得点次第で合否が決まるという「厳しい現実認識を持つ生徒」を育まなければならないことを、私たちに教えてくれます。

このように、入試問題の分析を通して、私たちは日々の指導の在り方と育てるべき生徒像を確認し、それに基づいて3年間という限られた時間で、どのような教育活動をどのように展開すべきかという指導計画を構築していきます。

「生徒の目線で問題を解く」それが真の入試分析です

各大学の入試動向の分析もまた、生徒の進路実現においては必要不可欠なものです。

センター試験の自己採点後の出願校決定から個別学力試験に至るまで、私たちは生徒にさまざまなかたちでかかわります。その間の生徒の伸びは、彼ら一人ひとりの性格はもちろん、その知的個性や学習歴を熟知しているだけではなく、各大学の入試をしっかり分析し、その特徴や動向を把握している教師がいて初めて可能です。合否判定を機械的に押しつけるのではなく、「きみなら必ずゴールまでたどり着ける」と自信を持って生徒の背中を押してくれる教師は、彼らに何よりも大きな勇気と希望を与える存在であるはずです。

入試問題の分析は高校の教科指導の出発点になるとも言えますが、実際に問題を分析する時に、私たち教師が忘れてはならないことが一つあります。それは「高度な知的訓練を受けた大人のやり方で入試問題を解くのではなく、自分が今教えている生徒の目線で解く」ということです。

高校の教科書に載っていない知識やそこで扱われていないスキルを使って解いてしまったら、それは高校教師に求められる入試分析にはなりません。

例えば、私の担当教科である英語の入試問題では、教科書には出てこない単語が相当数使われていることがあります。だからと言ってそうした難解な単語を「高校で習得させるべき語彙」に数える必要はありません。出題者にも、そのような意図はないはずです。大切なことは、教科書レベルの語彙を駆使して文脈を把握し、難解な単語の意味を類推することです。教師はそのプロセスを自分で経験して、それを生徒に提示する。それこそが、高校教師による高校生のための入試問題分析の基本です。

教科書中心の日々の授業の中で身につけた力で、難関大の入試問題を解くことを経験した時、生徒は大きく変わります。「自分たちでも解くことができる」という自信が生まれるだけではなく、毎日の授業の大切さを理解するようになります。だからこそ、入試問題の分析は、すべての生徒に多くのメリットを還元できる作業であり、たとえ今難関大への進学希望者が少ない高校であったとしても、生徒の力を飛躍的に伸ばすきっかけを作りうる価値のあるものと言えるのです。

実は私には、今も忘れられない苦い経験があります。20代の終わりのことでした。ある3年生の生徒に「先生、どうしても英語の勉強の仕方が分からないんです」と言われました。志望校を明確に持ち、将来目指す職業すら心に決めているその生徒に、しかも入試が迫った秋になって、どこから手をつければよいのか分からないと言わせてしまった……。私はこれまで生徒に何を教えてきたのかと、大きなショックを受けました。

勉強の仕方が分からないと嘆く生徒に「とにかくやってみなさい」と言うのは簡単です。しかし、その前に自分は「その生徒の目線」で授業しているのかを、若い先生方にはぜひ考えていただきたいのです。私はあの時まで「入試問題を楽々解ける大人の目線」で生徒を教えていたのだと思います。

決して教師の自己満足ではなく、生徒の目線で生徒のための入試分析が行えた時、私たちは初めて生徒の学力向上と進路目標の実現を保証できるのではないでしょうか。

しばた・ひろし　松江北高校では進路指導部長などを務め、同校の進路指導の中心的役割を担う。在任中、同校は全国の公立高校で最多となる国公立大合格者を送り出す。2008年度まで益田高校校長を務める。

「興味のある学問分野」で大学を選んだ学生は約65%

Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

図　大学選択で重視したこと（複数回答）

＊「上記にあてはまるものはない」の項目は省略した

出典◎「大学生の学習・生活実態調査報告書」／調査時期◎2008年10月／調査方法◎インターネット調査／調査対象◎18～24歳の大学1～4年生（ただし、留学生、社会人経験者を除く）／有効回答数◎4,070人

将来を考えた大学選びの指導により一層の注力が必要

図は、大学１～４年生に、「受験する大学・学部を決める際に重視したこと」について、当てはまる項目を挙げてもらった結果だ。「興味のある学問分野があること」が最も多く、次いで「入試難易度が自分に合っていること」「自宅から通えること」が続く。

上位の項目を見ると、学生はきちんと考えて志望校を選んでいるように思える。ところが、この結果を見た高校教師は、「興味のある学問分野を重視した割合は、もっと高くなければならないのではないか」と指摘する。ほとんどの高校では、「学びたい学問」や「将来就きたい職業」をよく考え、それを土台として志望校を選ぶように指導している。にもかかわらず、約35%の学生は必ずしも学びたい学問を重視して大学を選んではいないようだ。「興味のある学問分野があること」の類似項目には「取りたい資格や免許が取得できること」があるが、興味のある学問分野を選ばなかった学生のうち、10.3%しか、この項目を選んでいなかった。

そこで、「興味のある学問分野があること」を「選んだ学生」と「選ばなかった学生」の回答に違いはあるのか分析したところ、「選ばなかった学生」は「選んだ学生」より他の質問項目で比べても選択率が低いという結果が出た。「選ばなかった学生」はあまり複数の観点から大学を吟味していない、と推測される。

もう１つ、教師から指摘があったのは、「志望校選びがかなり現実的になっている」点だ。自分に合っている入試難易度や入試方式の大学、自宅から通える大学であることが、重視したことの上位に入っている。堅実といえる半面、「受験だけでなく、入学後の生活面でも安全を選ぶ、『そこそこ志向』がうかがえる。志望校合格という動機付けの維持が難しくなっている要因かもしれない」という高校現場の声もあった。

現場では今でも十分、将来を考えた志望校選びの指導に力が入れられているが、その意識が生徒たちに本当に浸透しているのか。いま一度、確認する必要があるかもしれない。

調査の詳しい結果は Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧ください
ベネッセ　研究　で　検索
http://benesse.jp/berd/

鳥取県立 **倉吉西高校**

進学実績向上

「若手教師にとことん挑戦させてくれる
学校の雰囲気が改革を進めるパワーになり
実績にもつながったのです」

▶▶▶ P.22

指導変革の軌跡

*そのとき教師は、そして生徒は
どう変わったか*

東京都・私立 **淑徳巣鴨中学高校**

大学入試問題研究

「教師同士が議論できる『土壌』をつくり上げることが
今後の躍進の鍵になると思います」

▶▶▶ P.26

兵庫県立 **夢前高校**（ゆめさき）

指導力向上

「若手教師の育成には、一人ひとりに頑張れば
達成できる課題を与えることが重要です」

▶▶▶ P.30

鳥取県立
倉吉西高校

進学実績向上

高大連携と探究活動で定員割れの危機から県内有数の人気校に

◎2009年に創立95周年を迎えた伝統校。99年度に単位制普通科高校に移行した。07年度から「倉西夢きらりアクションプラン」「鳥取大との連携事業」など生徒の視野を広げる活動を取り入れ、進学実績を着実に伸ばす。鳥取県版環境管理システム（TEAS Ⅱ）の認定校として、地球環境の保全に関する教育にも取り組む。

設立
1914（大正3）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約160人

09年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は鳥取大、島根大、岡山大、徳島大、愛媛大、島根県立大、下関市立大などに58人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、東京女子大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、甲南大などに延べ155人が合格。

住所
〒682-0925　鳥取県倉吉市秋喜20番地

電話
0858-28-1811

Web Site
http://www.torikyo.ed.jp/kuraw-h/

変革のステップ

背景
◎単位制に移行し特色化を図ろうとしたが、進学実績が低迷し定員割れ。地域からの信頼が失われる危機に直面 STEP 1

実践
◎「倉西夢きらりアクションプラン」「鳥取大との連携事業」などで、生徒の視野を広げ、知的好奇心を高める STEP 2

成果
◎夢の実現に向けて努力する生徒が増え、現役国公立大合格者数が倍増。過去最高の実績を2年連続で更新する STEP 3

自由な科目選択がかえって進路実績の低下を招く

「まさかここまでの結果が出るとは――」

2008年3月、鳥取県立倉吉西高校の職員室は歓喜と驚きの声に包まれた。前年度18人だった現役国公立大合格者が、この年35人と倍増し、過去最高の実績となったのだ（図1）。教師が感慨を抱いたのも無理はない。この年の3年生は、入学時に定員割れをした学年だった。その後も学力は伸び悩み、2年生7月の進研模試では、D判定以上の生徒が7人という状況だった。それが、本番では過去最高の実績を上げた――。07年度から進路指導主事を務める亀井修平先生は、躍進の理由を次のように語る。

「今までと同じことをしていたのでは、学校は変わりません。前例やマニュアルにとらわれず、我々若手教師に何でも『やってみろ』と、とことん挑戦させてくれる学校の雰囲気が、改革を進めるパワーとなりました。そして、生徒に高い理想を持たせ、その意識を最後まで途切れさせないように指導したことが、この結果につながったのだと思います」

3年前、同校は出口の見えない低迷にあえいでいた。高校入試の志願者数は地域からの学校評価の指標となるが、同校は05年度入試で16人の定員割れだった（当時入学定員200人）。地域からの期待に十分応えきれていない現実を、

改めて突き付けられた形となった。

原因の一端は、大学進学実績の低迷にあった。同校は、99年度に単位制の普通科高校として新たな一歩を踏み出した。特色化を図り、併せて進学実績を向上させ、地域にアピールすることが狙いとされた。

しかし、改革は裏目に出た。単位制の利点は、

鳥取県立倉吉西高校前校長（現・鳥取県教育委員会事務局参事監兼高等学校課長）
横濵純一 Yokohama Junichi
教職歴29年。同校に赴任して3年。「夢を語ろう、希望を持とう、可能性は無限大！」

鳥取県立倉吉西高校教頭
御船斎紀 Mifune Yoshitada
教職歴24年。同校に赴任して2年目。「人が伸びるには情熱が必要。情熱に限界はない。それを燃やし続けるよう生徒を挑発し続けたい」

鳥取県立倉吉西高校教頭
稲毛　靖 Inage Yasushi
教職歴23年。同校に赴任して10年目。「可能性への挑戦を生徒に呼び掛けていきたい」

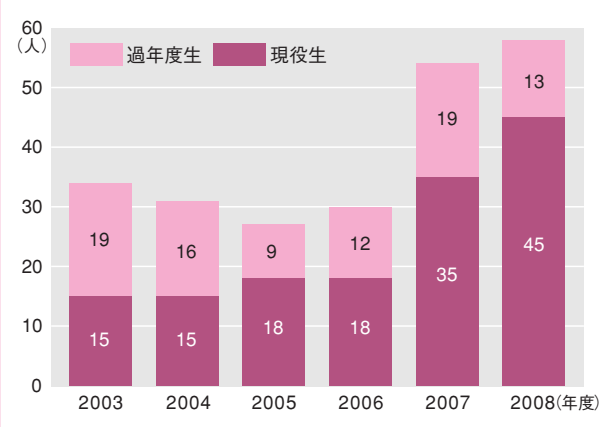
鳥取県立倉吉西高校
亀井修平 Kamei Shuhei
教職歴11年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。「当たり前のことを確実に。人よりも先に、人よりも一歩前へ」

鳥取県立倉吉西高校
新田秀登 Nitta Hideto
教職歴11年。同校に赴任して4年目。3学年担任。「モットーは『融通無碍（ゆうずうむげ）』。個に応じた指導を心掛けていきたい」

将来の進路に応じた科目選択が可能なことだ。ところが、科目選択の自由度を高めすぎたために、いざ志望校を決める段階で受験に必要な科目を履修していなかったり、受験のためだけの科目選択になっていたりと、弊害が出たのだ。

その結果、単位制1期生の実績は国公立大合格者11人と、全く振るわなかった。大学入試に必須の科目を必修にするなど軌道修正をしたが、進学実績は下がり続け、地域の信頼を取り戻せないまま、ついに定員割れとなった。保護者には「校内順位が40位以内でなければ、国公立大はあきらめた方がいいですよね」と言われたこともあり、中学校関係者の間では「今後、西高は存続するのか」といったうわさもささやかれ始めた。

図1　国公立大進学実績の推移



07年度にアクションプランを始めてから、現役の国公立大合格者が急激に増えた

知的好奇心を高め生徒の視野を広げる

転機は07年度に訪れた。横濵純一校長が、学力向上と社会性の育成のための大胆な改革を提示したのだ。「倉西夢きらりアクションプラン」（以下、アクションプラン）だ（P.24図2）。

「本校の生徒に欠けていたのは、自分の将来をイメージするために必要な知識や体験でした。大きな可能性を秘めているにもかかわらず、安易な進路選択をし、切磋琢磨する機会が少ないために自分に自信が持てないようでした。そこで、本物の学びに触れることによって知的好奇心を高め、幅広い視野を養う必要があると考えました」（横濵校長）

核となる取り組みは「チャレンジグループ活動」という、「総合的な学習の時間」を使って年8回実施する探究活動だ。全校生徒が学年・クラスの枠を越えて20の講座のいずれかに所属する。講座のテーマは、国際協力、医療、福祉、環境など社会的な課題から、映画研究、食、陶芸など趣味的なものまで幅広く用意した。

講座では、生徒が決めたテーマごとに5～6人のグループをつくり、調査・研究・発表を行う。必要に応じて、校外でフィールドワークを

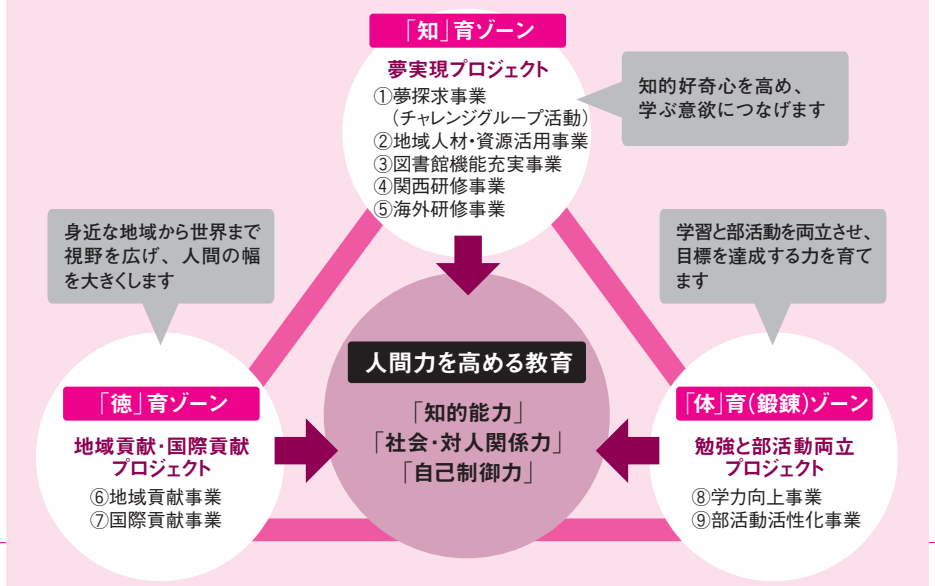
＊プロフィールは取材時（09年3月）のものです

したり、識者や専門家を招いての講演も実施する。例えば、「現代の地域政策」という講座では、グループごとに「過疎」「食糧自給率」などの課題を設定。地域の実態を知るために、県庁の職員や農家の方を招いて講演を催した。

カンボジア支援事業も、生徒の視野を広げる重要な取り組みだ。生徒会が中心となり、書き損じはがきなどを集めて換金。NPO法人に寄付し、井戸掘りや灌漑用水路の整備などに使ってもらう。その際、生徒の代表数人が現地に赴き、帰国後は全校生徒の前で現地の実態や寄付金の活用状況について報告する。

「現地を訪れてカンボジアの人々の暮らしぶりを知り、進路を変更して国際関係の学部に進んだ生徒がいます。もともと海外で働くという漠然とした希望はありましたが、それだけでは単なる自己満足であり、本当に大切なのは『いかに社会に貢献できるかである』ということに気付いたのです。社会に対しての視野を広げる経験が、進学への意欲や決意を固める結果につながっていると感じます」（亀井先生）

図2 「倉西夢きらりアクションプラン」概念図



夢実現プロジェクトの１つ「チャレンジグループ活動」は、09年度から５～６講座に絞り、内容も経済・経営や理学・工学、看護・医療など大学での学びにつながるものに変更する予定。それぞれの生徒の進路に応じて受講する講座を決め、興味関心を持たせるだけでなく、推薦入試・AO入試の小論文対策としても機能させる

出典／『鳥取県立倉吉西高等学校2008 School Guide』

高大連携を契機に「受験は団体戦」の雰囲気をつくる

アクションプランと並んで、将来への意識を高める上で重要な役割を果たすのが、鳥取大との連携事業だ。7月に同校の生徒のためだけのオープンキャンパスを実施してもらい、3年生の希望者を中心に、実際の大学の講義や特別講義を受けるというもの。夏休みに行われる通常のオープンキャンパスは、学生がキャンパスにいないため、大学の本当の姿は見えにくい。大学での学びやキャンパスライフを体感させるために、通常講義のある7月に実施し、具体的に大学生活をイメージさせようというわけだ。

「本校が目指すのは、地域に貢献できる人材の育成です。スーパーエリートではなくても、地元を愛し、支えていく人材、地域から頼りにされる人材になってもらいたい。鳥取大との連携を通して、生徒に具体的な大学像を描かせると同時に、地元の良さにも目を向けてもらいたいと思っています」（横濱校長）

生徒の学ぶ意欲の向上に加えて、切磋琢磨する集団をつくり上げていったことも、進学実績を支える原動力となった。学年集会などの場で、生徒に目標を高く持つこと、そこに向けて努力することの大切さを繰り返し語り聞かせた。校外模試は、自由参加から全員参加に変えた。

「偏差値40台前半の生徒であれば、多くの教師は国公立大に挑戦させるのをためらうものです。しかし、私たちは生徒の可能性を最後まで信じました。模試の合格判定やセンター試験の自己採点に左右され、ともすれば志望校のランクを落としがちな生徒を、担任や教科担当が激励しながら、意欲を途切れさせ

ずに個別学力試験まで引っ張っていったことが大きかったと思います」（御舩斎紀教頭）

「生徒から求められたものを与える教育ではなく、生徒の可能性を信じ、引き上げる教育に転換したのです」（亀井先生）

推薦入試やＡＯ入試にも、積極的に挑戦させた。それまでは一般入試の受験者の意気をそぐという理由から奨励していなかったが、07年度の3学年から方針を転換。当時、3学年担任だった新田秀登先生が学級に仕掛けたところ、10月に鳥取大のＡＯ入試合格者が出た。

「鳥取大ＡＯ入試の合格者が出たのを境に学級の雰囲気が一気に変わりました。本校には国公立大を目指す習熟度ホームがありますが、その学級は専門学校進学や就職希望者もいる通常の学級でした。机を並べているクラスメートの合格で、他の生徒も、国公立大は決して手の届かぬ夢ではない、自分も合格できるかもしれないと思ったようです。以前ならば安全に合格できる私立大を目指していた層の生徒が、次々と国公立大志望を表明したのです」（新田先生）

通常学級の仲間の頑張りが、一般入試での受験を目指す習熟度ホームの生徒を刺激し、受験準備へのスタートを早く切るという、思わぬ効果も表れた。更に、推薦入試やＡＯ入試が不合格でもあきらめず、一般入試で逆転合格を果たした生徒も複数人出てきた。改革前は6割ほどだったセンター試験の受験者数は、08年度入試では71・9％、09年度入試では86・6％に達した。

「推薦入試・ＡＯ入試受験の奨励によって生徒同士が切磋琢磨し合う集団をつくることができ、『受験は団体戦』という雰囲気を生み出すことができたのです」（新田先生）

視野を広げることが学びの姿勢を変え進学実績の向上につながる

09年度入試も好調を維持し、現役国公立大合格者45人と、2年連続で過去最高を更新した。進学実績の向上に伴い、同校への志願者数は激増し、09年度高校入試での実質競争率は県内の普通科高校の中でトップ。わずか2年の改革で、県下有数の人気校になった。

「単に進学実績を上げるだけなら、生徒を励ましながら学習量を増やすという方法もあると思います。しかし、本校ではさまざまな角度から生徒の向上心や好奇心を刺激し、学習意欲を高めることによって、進学実績の向上を果たせました。一見、遠回りに見える方法が、かえって生徒の心に火をつけ、潜在能力を引き出すことを、我々教師も今回の改革で改めて気付かされました」（稲毛靖教頭）

合格実績もさることながら、何よりも教師がうれしく感じているのは、生徒が広い視野を持ち、学びや自分自身の将来と真剣に向き合い、挑戦するようになったことだ。

「アクションプランを始めてから、生徒が私たちのアドバイスに素直に耳を傾けるようになってきたと感じます。以前は、わずかな知識や情報だけで進路を決め、一度進路を決めたら絶対に変えないという生徒が少なくありませんでした。しかし、世の中のさまざまな側面を知ることで、自分の視野の狭さに気付き、かえって謙虚な気持ちになったようです。そうした姿勢が入試の結果にもつながっていると思います」（新田先生）

09年2月、鳥取県高等学校教育審議会の答申では、生徒減を「きめ細かな指導ができる好機」ととらえ、現在の学級数・配置、多様な学科を維持するという方針が示された。これは、同校の改革や成果とも無関係ではないようだ。

「子どもが減るからといって、安易に学校を統合するだけで、本当に良い学校ができるとは、私には思えません。小さいながらも、それぞれの学校が努力し、火花を散らしながら独自性を出して競い合う方が、中学生の選択肢も広がり、学校の活力も高まるのではないでしょうか。『小規模校でもこれだけできる』ということを、本校の改革で証明できたと思います」（横濱校長）

一連の改革を通して「やればできる」という思いを強くしたのは、生徒よりもむしろ教師だったのかもしれない。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2007年度9月号特集「**変わる地方国立大**」、2006年6月号「**愛知県立犬山高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）

東京都・私立
淑徳巣鴨中学高校

大学入試問題研究

入試問題研究を通して授業力、受験指導に対する意識を高める

◎日々の学習、課外活動等を通して「感恩奉仕」の心を育むことを目指す。1学期を2～3か月とする「5学期制」を採用。希望進路に対応して「スーパー特選」「特選」などの5コースに分かれて指導する。部活動も盛んで、水泳部は全国大会の常連。バドミントン部は関東大会に高校女子が38年連続、男子は16年連続出場している。

設立
1919（大正8）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約420人

09年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は埼玉大、電気通信大、東京芸術大、横浜市立大などに7人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ623人が合格。

住所
〒170-0001
東京都豊島区西巣鴨2-22-16

電話
03-3918-6451

Web Site
http://www.shukusu.ed.jp/index.html

変革のステップ

背景
◎教師個人の力量や経験に頼らず、組織的に指導力を上げ、指導のばらつきを抑えたい
STEP 1

実践
◎教師一人ひとりに大学・学部を割り振り、夏休み中に入試問題を分析。解答・解説を冊子にし、全生徒に配布
STEP 2

成果
◎入試問題研究を踏まえた授業・面談により、生徒からの信頼感も高まる
STEP 3

古い指導観からの脱却を図ろうと最新の入試問題を研究

淑徳巣鴨中学高校は、2005年度に組織的な大学入試問題研究を導入した。狙いの一つは、教科指導力の向上だ。過去問を研究し、最新の入試動向を把握した上で授業に臨む教師がいる一方、自身の経験だけを頼りに指導する教師もいた。全校的に入試問題を分析する機会を設けることによって、教師の指導力向上、ひいては授業改善につながると考えたのだ。

教師の意識面の問題もあった。大森光芳教頭は次のように話す。

「かつて本校には、受験指導といえば推薦入試一辺倒だった時代がありました。ここ十数年で、一般入試に合格できる学力を身に付けさせる学習指導に転換してきましたが、05年度以前には、推薦入試中心だった時代の指導観を持つ教師がまだ多くいました。自分で入試問題を解いてみれば、かつての大学入試とは大きく変わっている、大学ごとに特色がある、ということが見えてくるはず。入試問題に触れ、客観的な情報やデータに基づいて指導することの大切さを感じてほしいと考えました」

意識の問題は、教師だけの課題ではなかった。入試問題研究の導入を主導した進路情報主任の橋本恭先生は、生徒の大学入試に対する意識も

変えたかったと話す。

「生徒が志望校を選ぶ時に、最もよりどころにするのは偏差値です。大学の難易度表を見ただけで『ここは難しい』『自分には無理』と結論を出してしまう傾向が多く見られました。生徒の偏差値がそれほど高くなくても、問題によっては合格できるケースもあるはず。実際の入試問題に触れることによって、生徒に自信を付けさせ、挑戦する意欲を高めさせたかったのです」

淑徳巣鴨中学高校教頭
大森光芳 Omori Mitsuyoshi
教職歴・赴任歴共に35年。「何よりも授業を大切にしたい」

淑徳巣鴨中学高校
大崎芳樹 Osaki Yoshiki
教職歴・赴任歴共に24年。進路指導部長。「成功するために考え、それに向けて行動することで『勝ち運』をつかむことが大切と思い、指導しています」

淑徳巣鴨中学高校
橋本 恭 Hashimoto Takashi
教職歴・赴任歴共に17年。進路情報主任。「悩み苦しみ、格闘した分だけ人間は成長することを、生徒に伝えていきたい」

淑徳巣鴨中学高校
鳥飼尊文 Torikai Takafumi
教職歴11年。同校に赴任して8年目。学習指導委員。「生徒一人ひとりを大切にしたい」

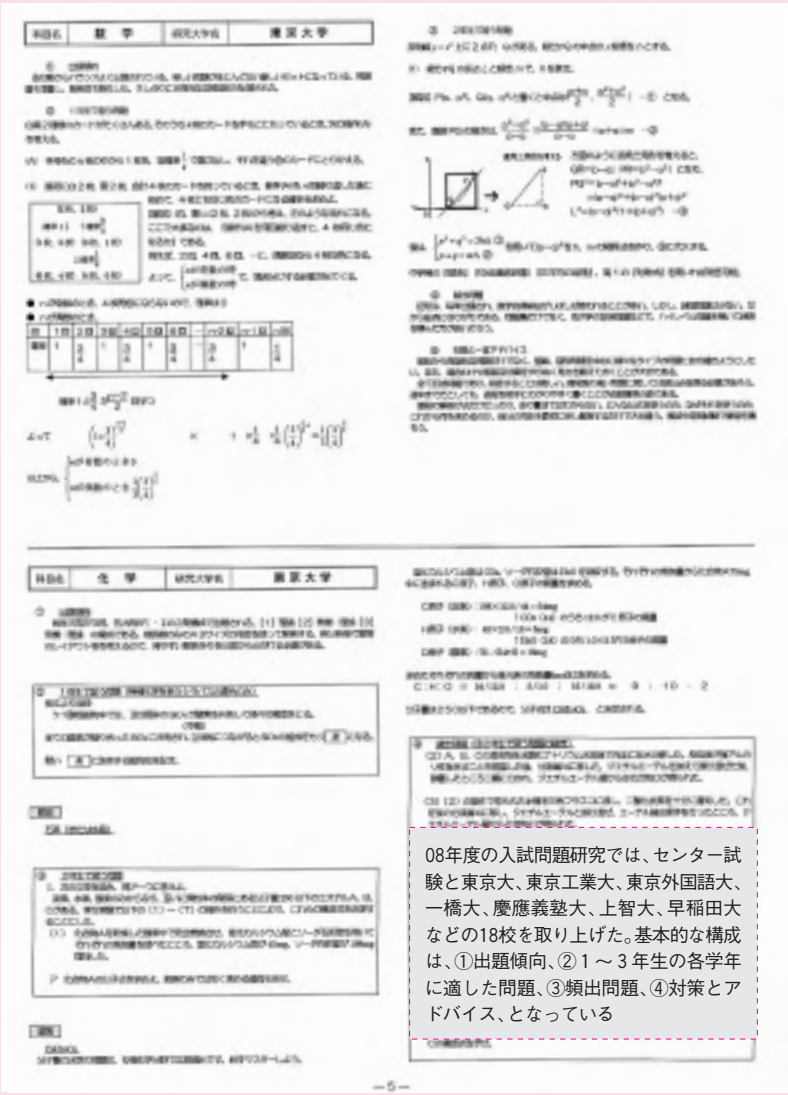
易しい入試問題で生徒に挑戦する意欲を持たせる

研究するのは、国・地歴・公民・数・理・英。大学は「生徒に行かせたい」という基準で学習指導委員会が選び、取り上げる学部・学科、問題は各教科の担当者が決める。

05年度の導入当初は、教科内で輪番で担当し、月に1、2回、入試問題を小問単位で選び、「大学入試問題研究通信」として1～3年生の全校生徒に配布していた。しかし、作成の手間やコスト面の問題があり、08年度に冊子形式に改めた（**図1**）。

作成の手順は次の通り。夏休み前に教科内で教師一人ひとりに大学・学部を割り振り、取り上げる学部の入試問題を夏休み中に研究してくる。分析結果とオリジナルの解答・解説は9月中に校内のサーバに集約し、印刷業者に印刷を

図1　『大学入試問題研究』の東京大・数学と化学（＊）



08年度の入試問題研究では、センター試験と東京大、東京工業大、東京外国語大、一橋大、慶應義塾大、上智大、早稲田大などの18校を取り上げた。基本的な構成は、①出題傾向、②1～3年生の各学年に適した問題、③頻出問題、④対策とアドバイス、となっている

＊解答・解説は、淑徳巣鴨中学高校のオリジナルのもので、東京大が公表したものではありません

＊プロフィールは取材時（09年3月）のものです

依頼。校正刷りを各教科で回覧して誤りがないか確認して、11月ごろに発刊、生徒全員に配布する。問題分析の構成は、各科目とも基本的に「出題傾向」「各学年で習う問題」「頻出問題」「対策とアドバイス」としている。

どの大学を担当するかは、基本的には立候補、あるいは教師の出身大学を考慮して決めるが、例えば数学科では、毎回異なる大学の担当になるように割り振っている。学部・学科については、その大学の入試問題を特徴付けているものから選ぶ。生徒に自信を付けさせるという意味で、あえて易しい問題を取り上げる場合もあると、学習指導委員の鳥飼尊文先生は説明する。

「数学科では、1年生でも解ける問題をあえて選び、冊子として配布するだけでなく、その問題に授業で取り組ませています。1年生でも難関大の問題が解ければ、自分も合格できるのではないかという自信につながると思うからです。こうした指導の積み重ねを通して、偏差値やイメージだけではなく、実際の入試問題も志望校を決める際の判断材料になっていくことを期待しています」

具体的なアドバイスが増え 生徒からの信頼感が増す

入試問題研究を始めて以来、授業の質が変わってきていると、進路指導部長の大崎芳樹先生は感じている。

「何より、授業が進めやすくなりました。あらかじめ入試問題を解いておけば、授業中に『ここは○年度の○○大入試に出た』『○○大を目指すなら、この問題は解けるようにしておきたい』というように、より具体的にアドバイスができます。指導が具体的になればなるほど、生徒は日々の授業の大切さを実感できるようになる。ひいては、教師への信頼感につながっていくと思います」

教師の「手作り」だからこそ、生徒に伝わるものがあると、大森教頭は指摘する。

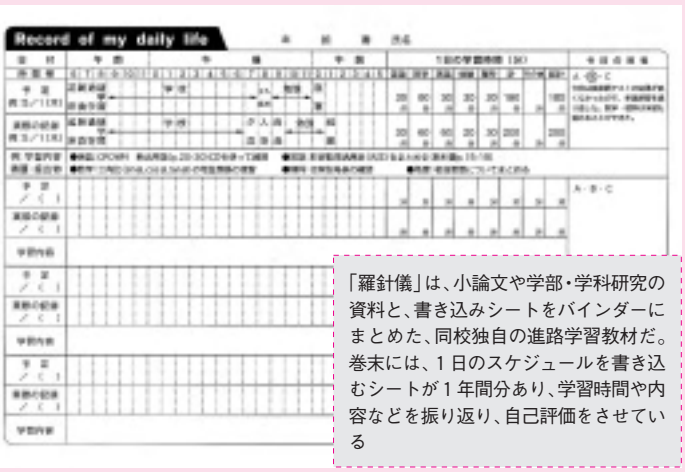
「導入前は『過去問題集なら市販されている』と言う先生もいましたが、教師の手作りだからこそ生徒を引き付ける面があります。生徒は、私たち教師が入試問題を実際に解いて、分析していると知っています。教師が頑張っている、勉強している姿を見せることによって、生徒のやる気も高まるのです」

実際、授業に意欲的に取り組む生徒が増え、授業後の質問が増えているという。定期考査の直前にしか質問に来る生徒がいなかった以前と比べて、大きな変化である。

指導力向上・授業改善に伴い、職員室の雰囲気も変わった。普段の会話で、入試問題について教師同士が話し合う光景が見られるようになったという。

更に、職員室や廊下で生徒と面談を行う姿が増えたのも、教師の意識の高まりを反映してのことだろう。同校では数年前からスタディーサポートを導入しているが、結果が出ると担任は必ず面談を行い、具体的なデータに基づいて、生徒個々人に合った行動指針を示す。「経験による指導」だけでなく、「客観的な裏付けに基づく指導」が加わったのだ。近年の私立大への合格実績を見ると、06年度入試で479人だったのが、09年度に623人と増えた。教師のきめ細かな指導が、生徒の進路実現にも影響している様子がうかがえる。

進路学習教材「羅針儀」



「羅針儀」は、小論文や学部・学科研究の資料と、書き込みシートをバインダーにまとめた、同校独自の進路学習教材だ。巻末には、1日のスケジュールを書き込むシートが1年間分あり、学習時間や内容などを振り返り、自己評価をさせている

強引にでも実行に移し教師の意識を変えていく

日々の指導で忙しい中、入試問題の研究・分析に取り組むのは容易ではない。導入に際しても、少なからず反対が予想された。しかし、当時進路指導委員会の責任者だった橋本先生は、少々の反対の声があっても導入を進めた。職員会議で提案をしたものの、表立った反対意見が出ないうちに、進路指導委員会内で了承を得て、導入に踏み切った。

導入当初こそ、一部の教師から不満の声が聞かれたが、取り組みが進行する中で、そうした教師の意識も徐々に変わっていったと、橋本先生は話す。

「導入当初、積極的に賛同しない先生がいたことは事実です。しかし、強引に実行に移さない限り、先生方の意識は変わりません。当初難色を示していた先生も、若手教師の取り組みを見たり、生徒が変わっていく姿を目の当たりにしたりすることによって、前向きに研究に取り組むようになりました。導入に反対していたのは、おそらく、具体的な方法を持っていないために、最初の一歩を踏み出せなかっただけなのです。まずは先行者の方法を見ながら、実際に取り組んでもらうことが重要だと思いました」

反対の声があってもスムーズに進められるよう、英語科では、推進者である進路指導委員会の教師が、東京外国語大や上智大などの英語を「看板」とする大学を受け持った。英語の配点比率が高くない大学は、他の教師に割り当てて負担にならないようにした。こうした配慮も、導入を進める際に一定の効果を果たした。

入試問題研究を軸に教師が議論する場を設ける

今後の課題の一つは、生徒への冊子の活用を促すことだ。ホームルームで活用方法を示したり、授業で使ったりして、生徒への浸透に努めているが、生徒が実際にはどの程度活用し、学習に生かしているかは把握していない。冊子に対する生徒の満足度を調べつつ、活用を促す手立てを講じていきたいとしている。

二つ目の課題は、入試問題研究を、教師個人の指導力向上だけでなく、組織的な指導改善に生かせる仕組みにしていくことだ。

「入試問題の出題意図をしっかり読み込み、教科内で指導方法を共有することも、入試問題研究の目的の一つです。しかし現状では、教師が個々の考えで指導し、組織的な対策にまでは踏み込めていません。入試問題研究を軸にして、大学ごとの指導方針について、教科内でいかに共有していくかが課題です」（橋本先生）

そのためには教師同士が議論できる土壌をつくり上げていくことが鍵になると、鳥飼先生は指摘する。

「現状では、作成した分析結果は校正時に教科内で回覧し、間違いがないかを確認する程度です。『VIEW21』の記事で、福島県立磐城高校が入試分析を通してベテラン教師が若手教師に指導しているという事例がありました（08年度4月号、欄外参照）。本校も理想としては、磐城高校のように入試問題研究をノウハウの伝達や教師同士の目線合わせのツールにしたいと考えています。取り組みの浸透度、教師の多忙感などのためにそこまで達していませんが、今後の目標です」

分析結果を組織的に確認する場を設けると、通り一遍の議論にしかならず、真の指導変革につながらないという懸念もある。それでも大森教頭は、教師同士の議論が指導力向上には必要だと考えている。

「入試実績は順調に推移していますが、学級によって進学実績が異なるなど、教師の力量にはまだばらつきがあります。実績を出している学級とそうでない学級の差は、担任と生徒の信頼関係にあると思います。授業改善や面談力の向上により、生徒とのきずなをより強くすることが、今後も本校が躍進し続けられるかどうかを左右する重要な鍵になると思います」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2008年度4月号「**福島県立磐城高校**」、2007年度2月号「**福岡県立筑紫丘高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）

兵庫県立
夢前高校（ゆめさき）

指導力向上

徹底したOJTで教師の意識が高まり、そして、生徒が変わる

◎兵庫県立福崎高校定時制課程の分校として設立され、1974年に夢前高校として独立した。「健康・誠実・敬愛」を校訓として、生徒一人ひとりの能力の開発と個性の伸長を図ることを重視。地元ケーブルテレビ局と提携して「夢前高校ワンポイント英会話」を放送、オープンスクールなどを通して地域に開かれた学校づくりを進める。

設立
1948（昭和23）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約120人

08年度進路実績
4年制大・短大には、兵庫県立大、大阪芸術大短大部などへ16人が進学。その他、専門学校進学者15人、就職者40人

住所
〒671-2103
兵庫県姫路市夢前町前之庄643-1

電話
079-336-0039

Web Site
http://www.hyogo-c.ed.jp/~yumesaki-hs/

変革のステップ

背景
◎生徒の「荒れ」によって、地域からの信頼が低下。生徒指導も組織的な動きにならず、成果が上がらない
STEP 1

実践
◎「不寛容とチャンス」を基本とした生徒指導、日常業務におけるOJTなどにより、生徒の意識改善、教師の指導力向上を図る
STEP 2

成果
◎生徒の生活態度が大きく改善。地域連携の効果もあり、地元からの信頼も回復
STEP 3

山本五十六の言葉に託された改革への熱い思い

2008年4月、兵庫県立夢前高校の教師は1枚のプリントを手にした。この年に赴任した原潤之輔校長が示した改革案である（図1）。「生活指導の徹底」「部活動の活性化」「広報活動の充実」といった取り組みが提案されたが、ひときわ目を引いたのがプリントの冒頭に掲げられていた山本五十六の言葉だった。

「やってみせ　言って聞かせて　させてみて
ほめてやらねば　人は動かじ」

山本の言葉を借りて、指導者としての心得を説いた言葉であり、自ら先頭に立って改革に当たる決意表明でもあったと、原校長は話す。

「校長には、その時々の課題に応じてビジョンを掲げ、分かりやすい形で教師に示す責任があります。それまで先生方には『今、何をしなければならないのか』『そのためにどうすればよいのか』という行動指針が示されていませんでした。私が率先して範を示し、教師や生徒の意識を変えたいと考えました」

確かに、同校は強力なリーダーシップを待ち望んでいた。長年、生徒の「荒れ」に悩まされていたからだ。同校は姫路市北部の山間部にある。町内に鉄道はなく、路線バスの本数も少ない。もともと、地域のための学校だった。しかし実際には、町内の中学校から進学する生徒は

3割。容儀の乱れ、遅刻の多さはもとより、授業中の徘徊や喫煙などの問題行動が地元住民の耳目に触れるたびに、同校に対する地域の信頼は下がっていった。退学率は県の平均を上回り、毎年2～3割の生徒が卒業前に学校を去った。

もちろん、教師は手をこまねいていたわけではない。教務部長兼進路指導部長の篠原歩先生は次のように振り返る。

「生活指導の強化など、何度も生活態度の改善に取り組みました。しかし、個々の教師の努力や学年単位の取り組みにとどまり、学校全体の動きにならず、学校を根本から変えることはできませんでした。教師の力量の未熟さにも課題があったと思います。赴任希望が少ないこともあって、本校は新任教師や臨時講師の比率が高く、全教師の6割が20～30代です。ベテラン教師は生徒指導に忙殺され、若手教師を育成する余裕を持てませんでした」

兵庫県立夢前高校校長
原 潤之輔 Hara Junnosuke
教職歴32年。同校に赴任して2年目。「自学自習できる生徒を1人でも多く育てたい」

兵庫県立夢前高校
若松 修 Wakamatsu Osamu
教職歴26年。同校に赴任して3年目。3学年主任。「熱意は能力に勝るということを、生徒に伝えていきたい」

兵庫県立夢前高校
篠原 歩 Shinohara Ayumu
教職歴24年。同校に赴任して9年目。教務部長兼進路指導部長。「生徒あっての教師であるという意識を常に持っていたい」

兵庫県立夢前高校
藤井生也 Fujii Ikuya
教職歴19年。同校に赴任して2年目。生徒指導部長。「どんな生徒にも厳しさと優しさをもって対応していきたい」

兵庫県立夢前高校
島村美奈子 Shimamura Minako
教職歴2年。同校に赴任して2年目。総務部。「知ること、学ぶことに生徒がワクワクするような授業をしたい」

図1　「平成20年度目標」として配付したプリントの内容

平成20年度目標―生徒指導を基盤にした教育活動の展開―
「やってみせ　言って聞かせて　させてみて　ほめてやらねば　人は動かじ」
山本五十六

■在校生への指導
①更なる授業の正常化
方策　1. 授業のルールの徹底
　　2. 時間講師との連携
　　3. 公開授業の推進
　　4. オープンスクールの実施
　　5. 若手教員の指導力アップのための研修会の実施
②服装・言葉遣い・挨拶の徹底
方策　1. 全員が同じ方向性を持った指導の徹底
　　2. 段階的な指導
　　（口頭注意→家庭連絡→保護者来校指導→特別指導）
　　3. 服装指導の機会を増やす（全校集会の復活）
　　4. 時間講師との連携
　　5. 敬語の指導（その場で直させる）…授業、廊下、食堂など
　　6. 挨拶は教職員自らが生徒、保護者、来校者に行う…先手必勝
③部活動への積極的な参加
方策　1. 新1年生に対して積極的な勧誘→できれば全員入部
　　2. 生徒指導の一環

■広報活動の充実
①ケーブルテレビの活用
方策　1. 英会話レッスンの企画と制作→成功すれば他教科も
　　2. 書道教室の宣伝
②中学校への働きかけ
　　1. 地元中学への出前講座（書道・英語など）
　　2. 中学校回り（1校につき年8～10回）
　　3. 特色選抜の在り方に関する説明（ビデオなど）
③学校開放
　　1. 公開授業時にオープンスクールを実施
　　オープンスクールの充実→新聞の折り込み広告
　　2. 学校評議員会の充実→メンバーの刷新

■懸案事項
1. 新しい制服への移行は可能か　2. 平成21年度特色選抜をどうするか

「生徒のことを思っているのか！」担任への一喝が生徒の心を溶かす

同校は組織的な改革へと大きく舵を切った。柱の一つは生徒指導の徹底だ。基本方針は「不寛容とチャンス」。毎日の指導では規則を厳格にし、例外を認めない厳しい態度で臨むが、最後はチャンスを与えて反省を促すという方法だ。

実際、ある生徒が退学もやむを得ないような問題行動を起こした。原校長はその生徒に反省の色を見て、もう一度チャンスを与えた。生徒

＊プロフィールは取材時（09年4月）のものです

指導副部長だった藤井生也先生は、生徒、保護者、そして学校の三者が納得できる対処法がいかに大切か、この一件で気付かされたと話す。

「その生徒は再び問題行動を起こし、自ら進路変更を申し出ました。校長からいただいたチャンスを生かせずに申し訳ないという思いでいっぱいだったと思います。その生徒が最初に問題を起こした時、これは学校の決まりだからと進路変更を迫っていたら、生徒も保護者も学校に対して大きな不信感を持ったと思います。私が前任校で生徒指導を担当していた時、本校で教わったノウハウを基に生徒指導ができていたら、もっと大勢の生徒を生き生きと輝かせられたのではないかという気持ちでいっぱいです。この件で、生徒・保護者と学校双方が納得の上で問題に対処するにはどうすればよいのかを改めて学びました」

ある日、こんなことがあった。当時2年生担任の島村美奈子先生が、朝、校門で服装指導をしていたところ、女子生徒が靴のかかとを踏みつぶして登校した。「去年までは何も言われなかったのに」と、服装指導に反発していた生徒だ。島村先生は注意したが、女子生徒は生返事をしながらそのまま通り過ぎてしまった。

その様子を見て烈火のごとく怒ったのが、原校長だ。その女子生徒に対してではない。生徒を素通りさせた島村先生に対してである。

「直ってないじゃないか、あなたは本当に生徒のことを思っているのか！」

島村先生はその時のことをこう振り返る。

「周りにいた生徒全員が立ち止まるほどの剣幕で怒鳴られました。私はその場でうつむき、校長の言葉を聞くしかありませんでした。恥ずかしい気持ちを抱えながら教室に入ったのですが、生徒の様子を見て驚きました。いつもは全員が座るまで5分はかかるのに、既に全員が座っていたのです。そればかりか、さっき注意された女子生徒が『ごめんなさい』と頭を下げたのです。それまで自分中心にしか物事を見られなかった生徒でしたが、私が校長に怒られている姿を見て、彼女なりに教師の立場に思いをめぐらせたのでしょう」

生徒を日常的に褒め自己効力感を高める

徹底した生徒指導で生徒の規範意識を育むと同時に、生徒の自己効力感を高めることも意識した。3学年主任の若松修先生は、褒めることによって生徒の意識を変えたかったと話す。

「本校の生徒は、学習でも部活動でも、機会を与えられなかったり、生活に余裕がなかったりしたために力を発揮できずにいた者がほとんどです。しかし、どんなに力のある生徒でも、教師が『お前は駄目だ』という態度で接していたら、頑張ろうという気は起きません。元気や自信を与えることが、生徒の可能性を引き出すために何よりも重要でした」

「月間MVP」も、生徒の自信を高めるために創設した。「あいさつがきちんとできている」「寒い中、頑張った」など、少しでも生徒が良いことをすれば表彰の対象となる。

教師が日常的に生徒を褒めるために、話題があればすぐに校長に伝える。例えば「試合でホームランを打った」と、部顧問から校長へ、また職員朝礼で全教師に伝えられる。授業中や廊下での通りすがりなどに、教師はその生徒に声を掛け健闘をたたえる。「先生はいつでも見てくれている――」。そうした充足感が、生徒の自己効力感、学校への帰属意識を高めるのだ。

OJTにより日常業務の中で若手の教師力向上を図る

同校では、OJTによる若手教師の育成に力を入れている。生徒指導、教科指導、学校経営など日常業務で経験を積ませ、実践的な力を身に付けさせる。例えば、ベテラン教師が問題を起こした生徒に話を聞く際は、若手教師を必ず同席させる。土曜補習では校長自ら英語の補習で教壇に立ち、若手教師に指導法を伝えた。

また、ベテラン教師にもどんどん取り組みを任せ、「教師力」を高めようとしている。

「ある先生には、客観的な視点で学校を見

る力を養うため、学校評価に取り組んでもらいました。別の先生には、いじめ未然防止のための文部科学省の支援事業に向けた準備を任せています。プロジェクトを成功させるのは、教師にとって簡単ではありません。しかし、企画の立て方から仕事の進め方、予算の付け方まで一貫して取り組むことで、確実に教師としての力量は高まるのです」（原校長）

英会話番組を通して地域との一体感を醸成

08年8月に放映を開始したケーブルテレビでの英会話番組も、OJTの一環だ。町民向けのケーブルテレビに住民が楽しめる番組の制作ができれば、地域に貢献でき、学校のイメージアップにもつながるというのが原校長の意図だった。

企画を任された島村先生は、同じ英語科の教師に相談したが、皆、番組制作の経験はない。英会話番組と決め、1年分のプログラムと絵コンテをつくり、局に提案した。10分間の番組を1日4回放映する枠をもらえ、収録・編集まで局が無料で支援する体制まで整えてくれた。

番組名は「夢前高校ワンポイント英会話」。英語圏で日常的に使う慣用表現を毎月1つ取り上げ、実際の使い方を学ぶ。同校に親しみを持ってもらおうと、英語科以外の教師、生徒が登場するほか、駐在所の巡査、地元の中学生たちにも登場を依頼し、地域との一体感を醸し出す。番組は同校のウェブサイトにもアップし、DVDに収録して地元中学校に配付している。

「番組の企画、実行を教職歴1年の私に任せてくださった時は、この機会を生かせるように努力しようと思いました。この企画が、開かれた学校づくりに役立つように、生徒の自信につながるように、先輩の先生方と試行錯誤しながら取り組みました。おかげさまで、反響も上々で、毎日楽しみに見ているという保護者の声も寄せられています」（島村先生）

番組出演が縁で、同校へ進学した生徒もいる。教師による中学校への英語の出前授業も実現した。今後は小学校での外国語活動の導入を見据え、地元小学校教師との交流も検討中だ。

「若手育成には、一人ひとりに頑張れば達成できる課題を与えることが重要だと思います。英会話番組や学校新聞の制作（図2）もその一つです。難しいことでもベテラン教師が手本を見せて一緒に指導する中でできるようになる。このように教師同士が学び合う雰囲気ができれば、学校は変わるのです」（原校長）

図2　学校新聞『Dream News 夢高』

地域へのPRのために、2008年度に創刊した学校新聞。OJTを兼ねて、若手教師に制作を任せている。1年間で22号発行した。中学校に配布するだけでなく、地域住民の目に触れるようコンビニエンスストアなどにも置いている

学校の雰囲気は1年で大きく変わった。遅刻や容儀の乱れは激減し、落ち着いて授業を受ける態度が定着してきた。教師の意識も高まり、若手教師の中には率先して授業研究を始めるグループが現れた。「これからは教科・進路指導を充実させたい」と教師たちは次を見据える。

「生徒は皆、磨けば光るダイヤの原石のようなものです。これまで磨かれなかったために、その魅力が表に出なかっただけなのです。今は一人ひとりの生徒が注目され、手を差しのべられることで生き生きと活動していると感じます。温かいまなざしがあれば、教師がどんなに厳しく接しても生徒は必ず応えてくれます。生徒中心の指導を徹底することによって、生徒はもっと輝き、本校の魅力も増していくのではないでしょうか」（若松先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2008年度6月号「**神奈川県立菅高校**」、2007年度12月号「**兵庫県立神崎高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）

2年生夏の進路意識向上と生活習慣の確立

2年生進級時に決意した「リセット」の思いも、次第に薄れてくるこの時期。
夏休みを有意義に過ごし、2学期以降の中だるみを防ぐために、
進路意識の向上と基本的な生活習慣の維持という観点からアプローチを行いたい。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです

1 オープンキャンパスで進路意識を向上させる

図1 オープンキャンパス活用シート

ダウンロード

①事前準備シート

私の現在の志望校　第1志望／

第2志望／

オープンキャンパスに参加を予定する大学とその事前準備

大学名	大学名
キャンパス名	キャンパス名
何を見る?	
参加イベントは?	
知りたいこと聞きたいこと	知りたいこと聞きたいこと

シートをいったん回収し、生徒が参加するオープンキャンパスは志望校かどうかを事前に確認してもよい。

②事後報告シート

オープンキャンパスに行って気付いたことを書こう

キャンパスの雰囲気
施設・設備
授業・研究
学生や教職員の様子
卒業後の進路
留学制度など

見るべきポイントごとに気づきを書かせる事後シートを「事前に」渡しておくことで、生徒に見学の視点を養うことができる。

図2 オープンキャンパスのポイント

ダウンロード

ポイント	ここをチェックしよう	大学生の先輩のアドバイス
キャンパスの雰囲気	実際にキャンパスに足を踏み入れれば、その雰囲気、広さなどがよく分かる。最寄り駅やキャンパス周辺地域の環境などもチェックしてみよう。	大学の雰囲気はやはり実際に行ってみないと分からないので行くべき。予想外に規模が小さかったりすることもある。また、大学周辺の雰囲気なども感じることができる。
施設・設備	行きたい学部が決まっている人は、研究に必要な施設・設備の充実度をチェック。演習室や実習室の利用状況（利用時間や座席数、パソコンの充実度など）も調べよう。	大学生は図書館を利用する機会が多いので、規模などをチェックすると、大学の勉学に対する姿勢が分かる。また、学食以外で学生が食事をする場所はどこか聞いておこう。
授業・研究	どのような授業が行われ、どのような分野の研究が盛んに行われているか、配布されるシラバスなどでチェック。模擬講義や研究室・実習室見学に参加すれば学びの雰囲気がよく分かる。	模擬講義の先生がよい印象ではなくても、先生はその人だけではないので、見切りをつけないで。高校と大学の授業のスタイルの違いを感じることが大切。
学生の様子	学生の雰囲気も大学によって異なる。自分が4年間通うならどんな雰囲気の大学がよいか考えてみよう。案内してくれる大学生に大学の様子を質問するのもオススメ。	大学生と触れ合えるような企画があれば、それにはぜひ参加して。掲示板などに張ってあるサークルやアルバイト募集のポスターを見ておくと大学生の生活を垣間見ることができる。
卒業後の進路	就職のためのサポート体制や、資格試験に向けての対策講座の充実度などをチェックしよう。個別相談会などで教職員や大学生に直接聞いてみよう。	卒業生の就職状況・進学状況は同じ学科でも専攻やコースによって異なる場合がある。進路選択のために詳しく聞いておこう。
留学制度など	大学独自の教育制度についてもチェックしよう。留学や他大学との単位互換、インターンシップなど、大学の枠を超えた学びが充実している大学もある。	留学なら、提携校の数や期間、単位認定の仕組み、留学費用、更に事前の語学研修などを確認。制度があっても実際は利用しにくいケースもあるようなので注意。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

プラスαの指導

生徒把握に事前準備シートを生かす

2年生の夏休み前は、志望校を決めて目標に向かっている生徒、まだ大学に興味関心がない生徒など、その進路意識はさまざまだ。事前準備シートの記入状況で、個々の生徒の進路意識はどの段階なのかを確認し、段階別に対応したい。特に、志望校が明確ではなく、学習習慣も身に付いていない生徒への指導は手厚く行いたい。「何もやらなかった夏休み」にならないように、夏休み前からの働き掛けが重要だということを、学年団でも共有したい。

保護者や友だちと参加し比較検討させる

オープンキャンパスに保護者と一緒に参加することで、親子で進路について話し合うきっかけが生まれたり、保護者の大学に対する認識が深まったりする効果がある。また、友だちとオープンキャンパスに行かせることによって、自分とは違う興味関心の大学を見させることができ、志望を別の角度から考え直す機会にもなる。「一緒に行った人と感想を話し合えば、異なる視点で物事を見ることができるよ」と言葉にして生徒に説明したい。

志望以外の大学を見る意味を確実に伝える

遠方の大学を志望する生徒の場合、志望校のオープンキャンパスに参加できないこともある。だが、たとえ志望校ではなくても、実際に近隣の大学に足を運び、大学ならではの雰囲気や高校とは違う学びの内容を知るのは意味がある。自分の志望校をチェックする観点が分かるきっかけになることも多い。「なぜ志望校ではない大学に足を運ぶのか」という問いに対する答えは、明確な言葉として生徒に伝えておく必要があるだろう。

活用後のフォロー

◎夏休み明けには、志望校調査や面談などを実施し、夏休み前後の生徒の進路意識の変化をしっかり把握する。そして、進路意識の高まりと学習時間の増加がリンクしている生徒には、その努力を評価し、後押しをしたい。また、志望校が変わった生徒には、なぜ変わったのか、その経緯を必ず確認する。実際、「案内してくれた大学生の感じが良かったから」といった安易な変更であることも、残念ながら少なくない。目指す学問内容や自分が期待する大学生活とのギャップをしっかり確認した上での前向きな変更でなければ、後悔しかねないことをLHRなどで伝えてもよいだろう。

データ活用のねらい

2年生の6月中旬～7月下旬の時期は、何となく過ごしている生徒と、目標を持ち前向きに過ごしている生徒の二極化が顕著に表れる。夏の長期休暇をいかに過ごすかは、高校3年間の質を決める上でもとても重要だ。しかし、2年生に対して危機感をあおり学習に向かわせる指導は、この時期はまだ効果的ではない。むしろ、進路意識を高めるような経験をさせることで、充実した夏休みを過ごすように指導したい。そこで、オープンキャンパスを活用する。

近年、多くの学校で、2年生の夏休みにオープンキャンパスに参加させる指導を行っている。ところが、「オープンキャンパスに行かせてはいるが、期待するほど進路意識が高まっていない」「大学の雰囲気だけで進路を固めてしまった」など、うまく活用できていないケースも多いようだ。夏休み前からの意識付けで、オープンキャンパスを意義あるイベントにし、生徒の進路意識を高めたり、進路選択の課題に気付かせたりしたい。

データ活用の流れ

まずは、LHRなどで、オープンキャンパスに向けて事前準備シート（図1①）を作成させる。オープンキャンパスにただ漫然と参加するのではなく、目的意識を持って出かけられるような設問項目を設定することがポイントだ。また、7月に模試を実施しているのであれば、志望校検討と併せて作成させるとよいだろう。

事前準備シートはいったん回収して担任がチェックする。特に、「何を見る？」「知りたいこと聞きたいこと」の設問については、その理由まで書かせるようにする。その際、図2を使用し、当日にチェックするポイント例を認識させるとよい。また、参加後の事後報告シート（図1②）は、クラスでの掲示や学年通信に掲載するなど、1人の生徒の経験をクラス、学年で共有する。

<活用例>

夏休み前に、オープンキャンパスに行く大学について調べさせ、進路意識を高める（図1①使用）

▼

事前準備シートに関して、見るべき視点などを教師からレクチャー（図1①、2使用）

▼

夏休み中に、オープンキャンパスに行き、報告書を作成させる（図1②使用）

▼

夏休み後、提出させ、クラスに掲示したり、素晴らしいものは学年通信に掲載して生かす（図1②使用）

2 夏休みに保護者を通して生活習慣を意識付ける

図3 保護者に望む生活習慣サポートのチェックリストと、成績相関データ

ダウンロード

- ☑ お子さんはあいさつをしますか
- ☑ お子さんは家の手伝いをしますか
- ☑ お子さんと食事を一緒にとりますか
- ☑ お子さんは朝、決まった時間に起きますか
- ☑ お子さんと1日の出来事を話していますか
- ☑ お子さんは夜更かしせずに寝ていますか
- ☑ お子さんは決まった時間に机に向かいますか
- ☑ 携帯電話の使い方にルールを設けていますか

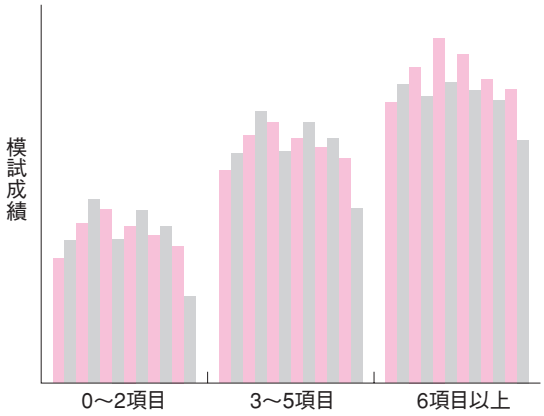


図4 三者面談シート

ダウンロード

生徒記入　（　年　組　）

●夏休みの目標

学習面	生活面

三者面談がこの時期実施されない場合、夏休み前に生徒に記入させ、保護者のチェックを受けて提出させる。

●1日の計画

6:00　8:00　10:00　12:00　14:00　16:00　18:00　20:00　22:00　0:00

●科目別学習内容

科目	使用テキストなど学習内容

●保護者記入

夏休みを子どもにどう過ごしてほしいですか。そのために保護者としてどのようなサポートをしたいですか。	三者面談で相談したいことがあればご記入ください。

図5 保護者に求める夏休みの過ごし方

ダウンロード

子どもと将来について話し合いましょう	保護者とよく話をしている生徒は、進路に対する意識が高くなる傾向にあります。受験直前に慌てないで済むように、今のうちから将来について話をしてください。
子どもの進路についてより関心を持ちましょう	「大学や入試の仕組みがよく分からないから、子どもに任せます」と言われる方もいらっしゃいますが、夏休み中にお子さんの希望進路について話し合い、何か1つでも調べてみてください。保護者の真剣な姿勢は子どもに伝わるものです。
教科書やノートを見てみましょう	単に、成績や模試、定期テストの点数だけ見ていませんか。教科書やノートを見て、「自分も高校時代は勉強に苦労した」などと声を掛けてあげてください。もちろん「こんな簡単なものができないの?」といった言葉は禁句です。
ルールの大切さについて話してあげましょう	子どもは身近な大人である保護者の言動を見て育ちます。人間形成の重要な時期、ニュースなどから社会の一員として守るべきルールを話し合ってください。
子どもと一緒に食事をとりましょう	一緒に食事をとることで家族のきずなは一層強まります。たとえこれといって話すことがなくても、食卓を一緒に囲むだけでもよいのです。多感な高校時代だからこそ、家族みんなが集まる場としての食卓を大切にしてください。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

ウェブサイトからダウンロード！ 生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター
http://benesse.jp/berd/
生徒指導ツール集　検索　クリック！
HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください
加工可能な資料がダウンロードできます！

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！　右のウェブサイトでご覧いただけます。

- ●2006年度9月号「2年生夏休み明けの意識付け」
- ●2008年度9月号「2年生夏休み明けの意識付け」

プラスαの指導

保護者の不安や悩みの共有・解消を

三者面談や保護者会、保護者通信などで、保護者の不安や悩みを収集する。それを保護者通信などに掲載して、みんな同じようなことで悩んでいると知らせたり、ほかの教師や先輩保護者の解決策を提示するとよい。また、保護者会など、保護者が集まる機会で、あえて保護者同士で子どもに対する不安や心配などを自由に話してもらう時間をつくるのもよいだろう。

親子学習記録を夏休みの課題に

夏休みの課題として、親子学習記録を課すのもよい。夏休み中に、学習記録を付けさせている学校も多いが、そこに、「保護者のコメント」欄を設ける。日々の子どもの様子を見て、保護者がコメントする必要があるので、親子のかかわりは自ずと増え、子どもの変化にもより注意をすることになるだろう。ただ、保護者に何らかの作業を依頼した場合、それに対する教師のコメントなどフィードバックは必須。お願いしただけで終わりでは次回以降の協力が得られにくくなる。

普段と同じ生活リズムの夏休みを提案

夏休みを境にして生徒の生活リズムが崩れてしまうことがないように、保護者に対しては「子どもが、できるだけ普段学校がある日と同じリズムで1日を過ごす」ことが理想であることを伝えておく。朝いつも通り起床し、夜更かしもしなければ、夏休み明けに生活習慣が大きく崩れるようなことはない。そして、図4の三者面談シートなどで生徒が考えた1日の過ごし方が実際に実現できるよう、保護者にも子どもが立てた計画に関心を持ってもらう。

活用後のフォロー

◎夏休みに取り組んだ規則正しい生活リズムの確立は、2学期以降においても大切だということを生徒と保護者に訴え続けたい。「勉強さえすればよい」「3年生になってから改まればよい」「高校生になったのだから子どもの好きなように」といった考えがいずれも誤ったものであること、生活習慣は高校生活の土台であることを、卒業生のケースなどを交えながら繰り返し伝えていく。それは、生徒、保護者、そして学校の三者が、それぞれのなすべきことに責任を持つことの重要性を確認していくことにもつながっていく。

データ活用のねらい

学校から離れる夏休みに、規則正しい生活習慣を維持・定着させることは、夏休み明けにスムーズに学校生活をスタートさせるためにも非常に重要である。何より夏休み中の生活習慣が規則正しいものであれば、家庭で学習する時間も自ずと確保されてくる。入試に向けての切迫感が少ない2年生だからこそ、まず生活習慣という足場固めを重視したい。

生徒自身に、生活習慣の重要性を伝えることはもちろんだが、夏休み中は保護者の協力も得るように働き掛けることが大切。夏休み前の面談などで保護者に「保護者が子どもに対してできる最大の支援は規則正しい生活の確立であり、それこそが、学習習慣の定着や進路意識の向上へとつながる」ことをしっかりと伝え、サポートをお願いしたい。守らせることは、「三食食べる」「早寝早起きする」「決まった時間に机に向かう」といった基本的なことでよく、こういったことを「子ども任せ」にしてないがしろにしないことが重要だということを理解してもらう。

データ活用の流れ

まずは、保護者のかかわり方の現状をチェックシートで確認する（図3）。そして、保護者のかかわり方や生活習慣の定着が、生徒の成績と相関があることを、データを活用し視覚的に伝える。図3の相関データや、09年度4月号当コーナーの「生活力と学力の相関を意識させるシート」などを利用するとよいだろう。その後、保護者として夏休みにどのような形で子どもに接していけばよいか、具体的にアドバイスを行う。図5のように、保護者に夏休みに心掛けてもらいたいことを、担任の言葉で一覧にして渡してもよい。

夏休み明けには、休みをどのように過ごしたか、図3のチェックを再度保護者通信に掲載するなど、生徒だけでなく保護者にも振り返ってもらう機会をつくり、秋以降につなげる。

＜活用例＞

保護者通信や7月の三者面談で、保護者のかかわり方の現状と夏休みへの意識を確認。（図3、4使用）

▼

保護者のかかわり方や生活習慣の重要性をデータを使って訴求（図3使用）

▼

保護者として夏休みに具体的に何をすればよいかを説明する（図5使用）

▼

夏休み後は、改めてしっかりと子どもを見ることができたかを保護者に確認してもらう（図3使用）

男女共同参画社会の実現に向け 憲法学からジェンダーに迫る

東北大大学院 法学研究科 ジェンダー平等と多文化共生研究センター

「ジェンダー研究」といえば、従来は社会学や政治学、文化人類学、歴史学などの諸学問からのアプローチが一般的だった。近年は、刑法や民法、労働法など法学の観点から女性の権利の向上を実現するための研究が活発に展開されている。東北大大学院の辻村みよ子教授は、グローバルCOEプログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」の拠点リーダーを務め、憲法学の知見から男女共同参画社会の在り方を追究し、具体的な政策提言や若手研究者の育成、啓発活動などに努めている。

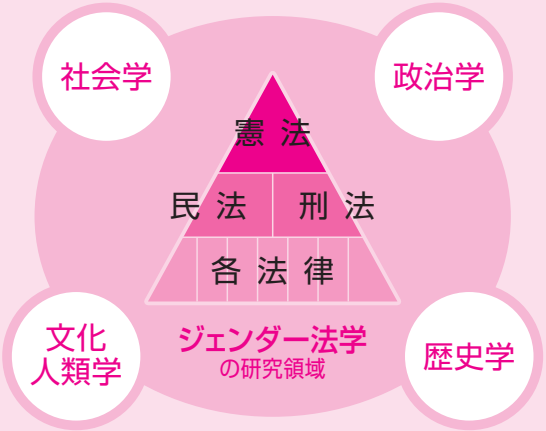
フローチャートで分かる「ジェンダー法学」

研究者の出身学部

法学部

◎ジェンダー法学の研究者は、大半が法学部出身。ただし、ジェンダー研究は、隣接する諸学問との連携が欠かせない。意識調査などのアンケート実施時には社会学の研究者と連携し、フィールドワーク時には文化人類学の知見を得るなど、学際的な視野、他分野と協同できる力などが求められる。

研究にかかわる学問と研究内容



◎ジェンダーとは生物学的な性に対する「社会的な性別」のこと。ジェンダー法学では、法律学の観点から男女の社会的地位の是正、女性の権利の保障などを目指す。憲法、刑法、民法、家族法、国際法、人権論など、あらゆる法律や条約、判例からのアプローチが可能であり、社会学や政治学、歴史学、文化人類学などの諸学問との共同研究も欠かせない。

研究成果と社会のかかわり

- 女性の政治参画
- 児童虐待対策
- 女性差別撤廃

など

◎研究成果は、女性の政治参画や児童虐待対策、ワーク・ライフ・バランス政策、女性差別撤廃条約の締結といった政策提言に反映される。若手研究者の育成、国際的なネットワークの構築、ジェンダー教育の推進といった形で、社会に直接、情報発信する機会も増えている。

辻村みよ子 教授 Tsujimura Miyoko

一橋大大学院法学研究科博士課程単位取得満期退学。
一橋大助手、成城大専任講師、同助教授、教授、
パリ第2大学招聘教授等を経て、
現在東北大大学院法学研究科教授。日本公法学会理事、
日本法社会学会理事、ジェンダー法学会副理事長、
内閣府男女共同参画局基本問題専門調査会委員等も務める。
『フランス革命の憲法原理』『女性と人権』『ジェンダーと人権』
（以上、日本評論社）、『ジェンダーと法』（不磨書房）など著書多数。

研究のきっかけ

フランス留学がジェンダー研究の出発点

私は広島で育ったということもあり、子どもの頃から憲法9条や平和主義などの問題に興味がありました。弁護士かジャーナリストになりたいと思い、一橋大法学部に進学しましたが、ゼミで学んだフランス革命期の憲法に刺激を受け、憲法研究の道に進みました。

ジェンダー研究を始めるきっかけとなった出会いも、この頃にありました。フランス留学中、[1]ジャコバン憲法について調べている時、フランス革命期の[2]オランプ・ド・グージュという女性が書いた女性の権利宣言の存在を知りました。当時はまだフランスでも知られていなかったその権利宣言の資料を日本に持ち帰って翻訳し、『法律時報』という雑誌に発表したのが、私のジェンダー研究の第一歩になりました。

その後、法学の世界に飛び込んだのですが、そこは完全な男社会。「女性は憲法の研究に向かない」「ジャーナリストになった方がいい」と言われたこともありましたが、研究の面白さから国民主権や選挙権など憲法の王道ともいえる研究に進み、実績を積み重ねました。今では選挙権は国民に平等に与えられている権利ですが、歴史的に見ると女性に選挙権がない時代が長く続きました。憲法の王道を研究し続けることが「ジェンダー法学」という新たな領域を耕すことへとつながったのです。

また、学会の活動にも積極的に参加するうちに、先輩方に「どの学会に行っても受付に座っている」「いつも発表しているね」と声を掛けられるようになりました。ひたむきな努力を認めていただけたのです。

ジェンダーに関する研究に本格的に取り掛かったのは、90年代に入ってからでした。グージュの書と出会ってから、十数年がたっていました。

その後、[3]男女共同参画社会基本法の制定、ジェンダー法学会の設置など、日本のジェンダー研究を取り巻く環境は大きく変化しました。私は研究活動と同時に、東北大の男女共同参画委員会の副委員長としてさまざまな企画を実施しました。その実績を基に、03年度には21世紀COEプログラムに、08年度には「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」の研究がグローバルCOEに選定されました。現在は多文化共生の視点も入れながら、研究を拡大、深化させています。

写真1　日々の研究活動では、図書館における専門書の検索が欠かせない。必要な図書を探し、ひたすら読みふける日も多い

研究の概要

憲法学の視点から個々の法律の妥当性を吟味

一口にジェンダー研究といっても、さまざまなアプローチがあります。日本で一般的なのは、家族や雇用といった社会学からのアプローチです。歴史学の視点から各時代における女性の地位の変遷を調べたり、言語学の観点から男性言葉、女性言葉について追究したりする研究者もいます。その他、文化人類学や芸術学、宗教学など、多様な学問分野からのアプローチが可能です。

法学からジェンダーへのアプローチは比較的新しく、私が研究を始めた頃の法学界では「男女の問題が学問になるのか」という冷たい反応が返ってくる状態でした。しかし、法学においてもジェンダーについての重要な論点はたくさんあります。家族内における女性の地位は家族法、

女性の雇用であれば労働法、性犯罪の問題なら刑法などが挙げられます。私の専門の憲法も同様です。ジェンダーとは無縁と思われがちですが、日本国憲法14条[4]では、すべての国民は法の下に平等であり、人種や性別などで差別されないことが規定されています。個々の法律を吟味する際も、国内法の上位法に位置する憲法学からの視点が極めて重要です。

例えば、民法733条で、女性は離婚後6か月経過しないと再婚できないと規定されています。この条文については国連から是正勧告を受けており、私も憲法違反だと考えています。確かに、昔は前夫の子か今の夫の子か区別できない場合がありました。しかし、今はDNA鑑定が可能ですし、夫が長期間海外にいるなど、妊娠していないと判断できる場合もあります。法律も科学の進歩や家族の在り方に応じて、一つひとつを見直す必要があり、その際に憲法は重要なよりどころになるのです。

女性の選挙権や政治参加も重要な論点になります。現在、我が国の衆議院における女性議員の比率は08年10月時点で9・4%であり、国連加盟188か国中136位です。女性を一定の比率に固定するクオータ制[5]の導入など、女性議員を増やす方策が検討されており、私も憲法学の観点から研究を進めています。フランスではクオータ制が憲法違反であるとの判決が出ていますが、そうした海外の事例も踏まえながら日本での導入の可能性を探っています。

高校生に伝えたいこと

社会を良くする志を強く持って視野を広げよう

法学というと、六法を暗記するといった地味で退屈なイメージがあるかもしれません。それは、法律が単に文章として固定化されたもので、日常の生活とかかわりがないと考えているからではないでしょうか。

しかし、私たちの研究では、クオータ制の導入を始め、離婚法等の整備や児童虐待対策、ワーク・ライフ・バランス[6]政策など、研究成果の多くを具体的な政策提言につなげています。法律学は今日的な課題と密接に結び付いたダイナミックで動態的な学問であり、決して現実と離れた机上の学問ではないのです。

写真2　法学研究科におけるゼミは、1日2、3時間、長い時は6、7時間に及ぶこともある

社会を変えていくためには、若者の力が必要です。市民革命の歴史があるフランスでは、中学生でもデモに参加します。日本では、選挙権を18歳に引き下げることにすら、抵抗感を持つ若者がいる現状です。

高校時代には、社会や政治に関心を持ち、視野を広げてほしいと思います。社会に出ると、学生時代には感じなかった「性」による区別を実感することがあるかもしれません。そうした時に、萎縮しないパワーを養う必要があります。自分には何ができるのかを一人ひとりが考えていくことで、明るい未来を切り開いていくことができるのです。

用語解説

❶ジャコバン憲法
フランス革命期の政治政党であるジャコバン党により1793年に採択された憲法。人民主権、普通選挙制、労働権を認める民主的な憲法だったが、施行されなかった。

❷オランプ・ド・グージュ
1748～93年。フランス革命期の劇作家で、フェミニズム運動の先駆者。

❸男女共同参画社会基本法
1999年施行。男女が互いの人権を尊重しつつ、能力を発揮できる男女共同参画社会の実現を目指す。

❹日本国憲法第14条（1項）
平等権に関する条文で法の下の平等をうたっている（「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」）。

❺クオータ制
Quota System　男女の機会均等を実現するために、国会議員や地方議会議員、国や地方の審議会、公的機関の委員や議員などを同じ性、人種等で独占させない制度。

❻ワーク・ライフ・バランス
2007年に政府、経済界、労働界等の合意により策定された「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」に基づく取り組み。国民一人ひとりが充実した気持ちで働き、家庭や地域生活などにおいても、人生の各段階に応じた多様な生き方が選択できる社会を目指す。

より良い法律を作るために現実の諸問題の矛盾を追究

岡本 寛さん Okamoto Hiroshi
東北大大学院法学研究科助教
〈岡山県立高梁（たかはし）高校卒業〉

蘇 恩瑩さん Soh Eunyoung
東北大大学院法学研究科研究フェロー
〈ソウル・鷗亭（クジョン）高校、梨花（イファ）女子大法学科卒業〉

Q なぜ法学分野を目指したのですか？

A **岡本**　私は明確な問題意識があって法学部に進んだわけではありません。高校までは理系でしたが肌に合わず、社会を見る目を養いたいという漠然とした思いで法学部に進みました。研究者になろうと思ったのは、3年生から所属した憲法のゼミがきっかけです。憲法の教科書だけでは分からない歴史のダイナミズムを感じられたからです。

蘇　私は修士課程まで母国の韓国で教育を受け、博士課程から東北大大学院に進みました。韓国でジェンダー法学を専門に研究している大学は、ソウル大と梨花女子大だけです。特に、私が卒業した梨花女子大はジェンダー教育の先進校で、美術や社会学、法律学などの教養科目とジェンダー教育を結び付けた授業がありました。そうした授業を受ける中で、社会には厳然として男女差別が存在することが分かってきました。それを解決するために、私の専門である法律学から何ができるかを考え、修士課程では性暴力をテーマに研究しました。そして、辻村先生がCOEプログラムの視察で来韓されたのを契機に、研究を更に深めようと留学プログラムを活用して来日しました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A **岡本**　アメリカにおける「討議デモクラシー」について研究しています。アメリカにはタウンミーティングに代表されるように、小さな共同体で討論を重ね、民意を醸成していく伝統があります。こうした伝統は、ヨーロッパでもそれほど多くはなく、日本では全く見ることができません。この伝統を統治機構と関連付けながら分析しています。

蘇　憲法の中で女性の人権がどのように位置付けられるか、日韓の憲法比較を交えながら研究しています。憲法には男女の平等を規定する条文があります。しかし、一人ひとりの女性の生き方や働き方はさまざまで、それは個人の尊厳や幸福追求権などをうたった日本国憲法では13条の規定でも保障されるべきものです。

博士論文には、男女の平等と個人の尊厳のバランスをどのようにとらえるのかという視点も盛り込みました。法律は今あるものがすべてではありません。憲法の理念や人々の生活とかけ離れているようであれば、改善する努力をすべきです。これからも、単なる「研究」に終わらせないよう、現実の諸問題と密接に結び付くテーマを追究し、男女共同参画社会の実現に向けて努力していきたいと思っています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A **岡本**　法学部に進んで良かったと思うのは、日本社会を相対化して見られる「目」を養えたことです。日本では会社や学校など特定の共同体への帰属意識が強い。しかし、いざ世界を見渡すと、欧米には自発的結社を組織する伝統があり、会社は会社、地域の共同体は別の世界というように切り離して考えられています。日本社会の特殊性にも目を向け、広い視野で世界を見渡してください。そうすることで、社会が全く別のものに見えてくるかもしれません。そういう視点を養うために法律学を専攻することも、選択肢に加えていただければうれしいですね。

大学院時代の岡本さんの1日

- 9:00　起床
- 10:30　**研究開始**　ゼミがない日は、研究書を読むか、論文を書いている。毎日、必ず1、2時間は図書館で過ごす。
- 13:00　**昼食**　研究生仲間と食事をしながら、1、2時間ほど語り合う時間を意図的につくっている。隣接分野を研究する仲間から得られる情報で、新たな着想を得ることも多い。
- 15:00　**研究再開**　ゼミがある日は2、3時間、多い時は6、7時間ゼミに参加する。
- 21:00　帰宅

生徒の力を信じ その可能性を正しい方向に 導ける教師でありたい

三重県立桑名北高校教諭 中村陽明 Nakamura Akihiro

いろいろな体験が生徒を成長させるように、教師にとっても厳しい体験がハードルを越える契機となる――。教職歴10年の中村陽明先生は、自身の経験を通じて生徒の可能性を信じ、導く指導を追究していくことが、教師の楽しさだと話す。

自分の甘さを思い知ったことが教師としての成長につながった

教師という仕事の本当の面白さに気付いたのは、教師になって3年目。前任の進学校で1、2学年と持ち上がって3学年担任となった時です。それまでに受け持った学級で、生徒が度々問題を起こしたこともあり、私に3年生の担任が務まるかという議論となったのです。結果として引き続き担任をすることになりましたが、そこには大きなつまずきが待っていました。

私が受け持ったのは、学年の中でも成績が伸び悩んでいるクラス。生徒の大半は中学時代優秀であった自身の栄光に浸り、現実を見ていませんでした。そうした生徒にどのようにして前を向かせ、希望進路を実現させていこうかと、私は大いに張り切っていました。

ところが、5月に行われた最初の進路検討会で、壁にぶつかりました。私は生徒一人ひとりの希望や学力を考え、適切だと思う志望校を挙げたのですが、ある先生に「君の判断では生徒の可能性を狭めている。本当に生徒を伸ばそうと思って真剣に考えたのか」と厳しい口調で指摘されたのです。自信を持って指導に臨んでいただけに、衝撃を受け、自分の視野の狭さと知識不足を思い知らされました。年下の先生もいる場で恥をかかされ、悔しさのあまり、反論しようにもその言葉が出てこないほど打ちのめされたのです。

それから入試本番までの8か月、私は生徒の可能性を信じ、正しい方向へ導くためにはどうすればよいかを徹底的に考え、何でも実行しました。模試で成績が伸びている学級があれば、自分の学級とはどこが違うのかを観察しました。その教室はぴかぴかで、掲示物も真っすぐ張られていました。担任に聞くと「ここまできれいにしないと、生徒は落ち着いて学習できない」と言われ、早速自分の学級でも隅々まで掃除をするように指導しました。ある時は、LHRでの話題を先生方に聞いて回りました。生徒が伸びている学級ではどのような話をしているのかを知りたかったからです。自分ができないことを知ることで、周りの先生に相談できるようになったのです。

なかむら・あきひろ
教職歴10年。赴任2校目となる桑名北高校では6年目。担当教科は理科。1年生担任。2008年度は進路指導部でインターンシップを担当。

◎1980年に開校した全日制の普通科高校。大学進学を目指す「カレッジクラス」を1年生から設け、「チャレンジクラス」（一般学級）と共に、生徒一人ひとりの進路実現を支援する。
◎教員数…非常勤も含め66人 ◎1学年生徒数…170～200人
◎2007年度卒業生の進路実績…4年制大学には27人、短大には9人、専門学校には43人が進学。就職は81人。

先輩の指導を手本としながらがむしゃらに進んだ結果、受け持ちのクラスから国公立大に数人合格者が出ました。自信を持てなかった生徒が、何かしら手応えを感じて成長していく。それを目の当たりにした1年間が、私の教師としての在り方を決めたのです。

困難をバネにできるような指導をしていきたい

前任校で学んだ「生徒をいかに導くか」という姿勢は、今でも変わりません。

ある時、本校で親子関係に問題を抱えている生徒を受け持ちました。生徒は対人恐怖症の傾向にもあり、登校しても教室に入れない日が多くありました。しかし、頭ごなしに叱りつけてもうまくいくとは思えません。そこで私は、納得いくまで生徒と向き合い、授業を受けられるようにする決意を固めたのです。

話し合いの最中に生徒が怒鳴り出し、教室の外へ飛び出したまま数時間戻らないこともありました。しかし、私は待ち、今すべきことは何かを、時には厳しく生徒に粘り強く伝え続けました。保護者へも、生徒のマイナス面の報告ではなく、「可能性」から伝えました。帰宅後、いつものように厳しく当たることのなかった親の変化に、「自分は信じられていると感じた」と後日話してくれました。

どうにか毎日、授業に出られるようになった矢先、その生徒の家庭で大きな問題が起き、転校すら頭をよぎる事態となりました。ところが、「家族が大変な時だからこそ、私は頑張る」と言い、登校して授業もしっかり受けたのです。生徒の成長にとても驚かされた私は、それ以降、その生徒には人生全体の中での今の位置を意識させる声掛けをしました。「階段が10ある中で、今は4。その一段を上るのが苦しいだけで諦めてはもったいない」と激励し、道を外れないように伴走していきました。いつしか生徒は「人の役に立ちたい」と口にするようになり、介護について学べる4年制大学を志望。見事、合格しました。

人間には困難があっても乗り越えられる力があり、逆境はむしろバネとなって大きく成長していくチャンスにもなる――。学校でそれを可能にするのは、生徒を一番近くで見ている担任だと思いました。

実は、前任校の進路検討会で私に厳しく当たった先生から、その後、「中村先生なら伸びそうだからあえてきつく言った」と打ち明けられました。力のある教師には、生徒（若手教師）にどの程度の負荷をかければどのくらい伸びるのかということが分かる。私も授業や部活動など、どのような状況でも、生徒の力を信じ正しい方向へ導いていける教師でありたいと思います。

自分がかかわるスケールを少しずつ広げていく

今の私の課題は、学級から学年、学校全体へと、自分がかかわるスケールを少しずつ広げていくことです。学級の生徒を導くのはもちろんですが、それだけで学校全体を良くしていくことは難しいからです。まずは自分ができることから始めようと、有志の先生方と頻繁に模擬授業会を開いています。教師同士で意欲を高め合い、かかわる生徒を良い方向に導きたいという思いがあります。

また、校内外の研修会に参加し、校種や教科の異なる先生の授業や指導を数多く拝見し、自分なりに消化して取り入れるようにしています。経験者の話に勝るものはありません。自身の体験を振り返りながら、私が直面しそうな出来事を予測してアドバイスをしてくれるからです。話を聞きたい先生には短時間でも話し掛ける。そうした姿勢が、更に他校の先生や校外での研修会を紹介してもらうという次の学びの場へとつながりました。

10年後、20年後、自分がどういう教師でありたいのか。その目標をしっかりイメージしながら、これからも先輩方の指導を手本とし、生徒や後輩の先生の可能性も伸ばせる教師を目指していきたいと思います。

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 2

教育最前線からのホットな話題を紹介します

中・高・大相互の連携こそが生徒の成長の鍵

4月号「中・高・大とつなげる『学び』と『指導』」は大変ありがたい特集だった。中・高・大の互いが批判し合うのではなく、現在どのような課題があるのかを理解し、それを解決するための方策を連携して考えることが大切である。それぞれの接続がうまくいくかどうかが、生徒の成長に大きく影響する。プラスの方向に変わるようにデータを参考にしながら指導のポイントを絞りたい。［岡山県立邑久高校・杉山義則］

教育活動のどの部分に重点を置くかが重要

4月号特集の対談において語られた、現代の高校生像に非常に共感した。やはり高校現場の先生方の言葉は身近に感じる。高校3年間に求められるものが、あまりにも多くなりすぎて、教師（生徒も）がそれを過大な負担に思い始めているのが現状だと考える。そんな現代において、北澤先生の「限られた人員と時間の中で、何に教育活動の重点を置くか」という議論はもっと広がってもよいのではないかと感じた。

［愛知県立安城東高校・江崎寛］

栃木高校のリアルな記事に共感

4月号の「指導変革の軌跡」で紹介された、栃木県立栃木高校の進路指導委員会は大変うまく機能していると思う。各教科からの具体的なアドバイスを担任が生徒に伝えている点は、担任は多くの教科担当者の代弁者であるということを示している。それが面談を充実させるポイントである、という点に共感した。また、取り組みを築いてきた教師の顔がちらつきながらもブラッシュアップを図っている先生方の心情は想像に難くない。本校でも、栃木高校と同様の問題を抱えており、大変リアルな記事だと感じた。

［滋賀県・匿名希望］

「生きたデータ」リニューアルでより使いやすく

「生きたデータ」のコーナーは「活用」という点でより分かりやすく、使いやすくなった。特に「データ活用の流れ」は参考になる。4月号の図3についての「学習記録などは、記入することが目的ではない。日々の取り組みの改善点を生徒自身に見つけさせ、どう取り組むべきかを考えさせる場として活用」という記述に注目した。面談等でのデータの生かし方を考える上で非常に良い視点だ。

［埼玉県立不動岡高校・久保島昌一］

新コーナー「30代教師の情熱」の今後に期待

「30代教師の情熱」は印象に残った。30代前半までは情熱だけで何とかなる。30代後半からは情熱と共に教師としての技量や見識が大事になってくる。それをどう身に付けるかのヒントは貴重である。一人の記事は短くても、できるだけ多くの30代中盤以降の教師を取り上げてもらいたい。

［千葉県立佐原高校・田中三郎］

教師川柳

一学期　猫の目行事で　おおわらわ

兵庫県・匿名希望

『VIEW21』へのご意見・ご感想をBenesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。

②画面右端の『VIEW 21』の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。

③入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

小誌に対してお寄せいただいた「全国の読者の声」がウェブサイトでご覧いただけます。

http://benesse.jp/berd/

編集後記

この3月で退職された先生にお話を伺いました。「成績上位層、下位層への対策は必要ですが、それが中心ではありません。真ん中にいる、地味で目立たないけれど頑張っている多くの生徒こそ、学校の中では主役であることを忘れてはならないのです」公教育の本質が、この言葉の中にあると感じました。（小泉）

VIEW21 2009 September 9月 Volume 3

次号は 8月27日発行（予定）

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

VIEW21 6月号 Vol.2　2009年6月6日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸満
撮影協力　荒川潤、川上一生

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2009